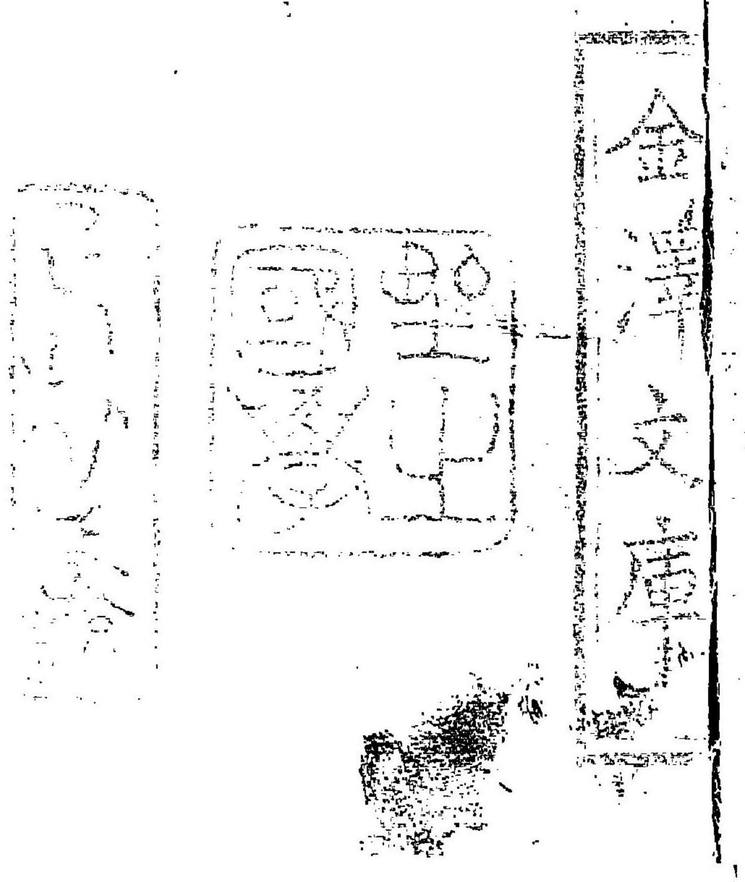
讀書便覽

279
11



凡例

一、讀書便覽は其名の如く初學者が讀書上の用意と書籍簡擇とに便せん爲に輯錄したる小冊子也讀書の法もと其人の資により學により取捨一なる能はざるを以て本書は成るべく共通の法を說き特に一人の爲に部門を設はざるとを辨ず又書の新古を向はず一例その價格を擧げ

一、書目を擧ぐれは必ず其刊未刊を說き得易きと得易から

請求
39 8 6
交内

たり價格は新本は定價を志し古本は主要なる書店の賣價を志るす

一、書名は主として得易きものゝ中に就て善本と考ふるものを擧げたりされども編者の所識頗る狹ければ果して要領を得しや否やは自ら保し難し唯この書を輯むるに就て編者は自己の貧しき腹笥を忠實に讀者に捧げ得たりと信ず

一、讀書法といふものもと己が履踐の方則を以て讀者に强ゆるに過ぎずこの書亦編者が日常の課業のみもし說て精しきこと能はずとせばこれ編者が讀書三昧に入らざるの罪なりとなす

一、讀書は措大の習氣なり讀んで何の利するところ有るか否かは編者自から知らずこの書は唯讀書の爲に讀書する世間同臭の讀者に推薦す

明治三十九年七月

編者識

讀書便覽目次

第一編　讀書法……一
第一章　讀書の要約……一
第二章　讀書の利益……一〇
第三章　書籍の簡擇……二四
一、簡擇上の注意……二四
二、書籍の感化……三八

三、古書と近刊書……四三
第四章　讀書法……四六
一、讀書法の第一義……四六
二、讀書力の養成……四九
三、訓詁を正す……五六
四、古文古義……六〇
五、著書の時代……六四
六、著者の人物……七〇
七、卒讀と再讀……七四

第五章　書籍の購入……七八
一、如何なる書を購ふべきか……七八
二、購入に就ての注意……八三
第六章　書籍の保存……八七
第七章　藏書家の注意……九六
一、排列の方法……九六
二、書籍の分類……九九
三、目錄の編成……一〇〇

四、藏書家の德義……一〇一
第二編　國文學書の研究法……一〇五
第一章　一般の要領……一〇五
第二章　歷史雜史よりする研究……一〇七
第三章　文學よりする研究……一〇八
一、物語本類……一二〇
二、草子類……一二八
三、日記類紀行類……一三三

四、和歌……一三七
五、雜……一五二
第四章　語學よりする研究……一五九
第三編　漢文學研究法……一六六
第一章　漢文研究の要約……一六六
第二章　經釋の研究……一七〇
第三章　子解の研究……二一〇
第四章　史部の研究……二二〇

第五章　文學の研究……二二七
第六章　音韻訓詁の研究……二四二
附錄　學者の用意……二五二

讀書便覽目次終

讀書便覽

山方香峰編

第一編　讀書法

第一章　讀書の要約

人生の遭遇何ぞ限らん、生れて清世に遭ふは二の幸福あり、一は安んじて讀書の閑生涯を遂げ得ることなり、二は古今東西の書籍を讀み得るの便宜あることなり、吾人にして若しも亂世に

生れ出てなば、禽走獸犇生を偷むに遑あらず、何を以てかよく明窓の下、淨几の前、亢々として書籍と周旋することを得ん、又よしや昇平の世に生れ讀書に供すべき時と資と共に缺く所なきも、剞劂の業今日の如く盛ならずは、奇書珍本容易に吾人等措大の手に到らざる也、蘇東坡の李氏山房藏書の記に曰く、余猶老儒先生を見るに及ぶ、自ら言ふその少かりし時、史記漢書を求めんと欲するも得べからず、幸にこれを得れば、皆手自ら書し、日夜誦讀、唯及ばざらんことを恐れたり、近歲市人轉々相摹刻し、諸子百家の書、日に萬紙を傳ふ、學者の書に於ける

多くして且つ致し易きこと此の如くなれば、其文詞學術昔人に倍蓰すべきに、而も後生科擧の士、皆書を束ねて觀ず、遊談根なし、此又何ぞやと、今の印刷術の進歩と普及は、更に東坡の生時に千倍萬倍す、讀書家の爲には實に斯の如き至幸の世なかるべきに、書を束ねて讀まざるもの多く、看るも草々に瞥過し卒讀して書意を領せざるもの少からず、例を數百年前の宋代に取るに及はず、吾邦に於ても明治以前は極めて書に乏しく、學者多くは且書し且讀み、その劬勞は今の讀書子が左右に亂抽して讀むが如き容易の業にあらざりしと、常に故老の談に聞く所

なり、仙臺の國分松嶼は磐溪以後の通儒なり、予が友のこの門に遊びしもの曾ていふ、松嶼少時、賴氏の日本外史を得ることを能はず、手抄して讀を終へりと、一部の日本外史尙然り、その志篤く學問に努めしことこれにて知らる、又森田珉岑といふは吾故鄕の學究なり、予曾て市上の書肆より其手錄せる劍南全集、鷗北詩鈔、賈長江集、蛻嵓文集、管茶山集、竹外二十八字詩等を購へしことあり、楷法謹嚴にして蠅頭の細字一々讀むべし窮陬書に乏しきの地、經傳の註疏より諸子百家の書に及び、彼等の稱して緖餘の小枝と做す詩文集の如きに至つて、皆多くは手鈔して其用に當てたる也、これを今日の讀書子が、零碎の貲を以て數百卷の書を購ひ得、然らざるも一たび圖書館に入れば金籙玉冊珊々然として、石渠天祿の富これを左右に逢迎するを得るに比せば、その爲學の便不便、處生の幸不幸、もと同日にして語るべからざるなり、然れども便なるもの終に果して便か幸なるもの終に果して幸か、この至幸至便の徒が成就する所、常に却て不便の世に生れ不幸の生を遂げし先輩に企及し得ざるは何ぞ、或人曾て齋藤竹堂の文を評して曰ふ、竹堂は文の易きを看て未だ文の難きを看ず、これ大宗たる能はざりし所以なり

と、今の讀書子は書を得るの易きに狃れて未だ書を得るの難きを知らず、隨て書を讀むの易きを看て未だ書を讀むの難きを看ず、又隨て書を解するの易きを知りて未だ書を解するの難きを知らず、註疏の書紛として架上に堆ければ、幽渺深岨の文も經意せずして之を讀み、皓皤艱澁の文も會心に到らずして卷を釋く、斯の如くなれば再び三たび讀破せし書も常に生面の客の如く、相遇ふて相知らざるべく、萬卷の裏に沈籍すと雖も一生其解を得んと難し、傾蓋して舊の如きものなり、白頭まで新なるものあり、交道を論するの言移して吾が讀書道を評し得べきな

り、讀書の要は實に書と友たるに在り、若し友道は友の心を得るにありとせば、讀書の第一義亦書の心を得るに在るのみ、身已に清代に生れて安んじて讀書の閑生涯を遂ぐることを得、並せて東西古今の珍書異本を讀破するの便宜あり、何の故にかこの無比の寵賚を忽にして書卷と相周旋する人生の至樂を味ふことを爲さゞる、由來人の樂事は少長、貴賤、貧富、賢愚によりて差違あり、竹馬紙鳶の樂は、髮その肩にかゝり、頰は熟せる林檎の如く赤らみたる少年時代に於てこそ愉快なれ、眼は盲せる如く耳は聾せる如く、齒豁に髮疎なる老衰者は、これに何

の興味もなかるべきなり、獨り竹馬紙鳶のみならず、衣服器玩のみならず、絲竹の耳に於ける、倩盼の眼に於ける、或は酒池肉林を以て國を廢せる桀あり、或は善言を聞て人を拜せし禹あり、その樂むところ人により各々一たらずと雖も、只讀書のみは何人をも通じて其樂を享くることを得べきものなり、陣中にホーメル集を枕とせし歷山王より、牛角に漢書を懸けし寧戚に至るまで、尊卑貴賤を論ぜず、賢愚貧富を問はず、眼に一丁字あるものは以てこれに消遣するを得ること、李衛公の雨を行るに手中一滴卽ち平地一尺に及ぶが如し、卽ち其樂の何人にも行き渡り、何れの場合に於ても享受し得る點に於て、讀書は實に人生第一の至樂といふに妨げなし、況んや今日の如きは都市の地は論なく、僻陬窮境尙書に乏しからざる折柄なれば、人の性情を損耗する聲色の樂にかへてこれを樂むは、娛樂の上に於ても、智識吸收の上に於ても、將品性陶冶の上に於ても、最も喫緊にして又尤も利益多き方法の一たらずんはあらず、若し其獲易きに狃れてこれを尊重せず、或は閣して讀まず、放逸懶惰にして勉むる所なくんば、獨り古人の勤苦劬勞に對して恥づべきのみならず、一には淸代の恩賚を忘れ、かねて自己の享くべき

怡樂を履棄するにひとしからずや、處生の一路敢て讀書により
て打開すべしといふにあらざるも、讀書は決して廢すべきもの
にあらじ

第二章　讀書の利益

同じく書冊なれども書自體已に相違あり、これを贖ふ目的にも
差別なり、讀む人に至つては更にその心一ならず、行は竪に志
るすあり、横に記るすあり、卷は右より披くあり、左より披く
あり、書中記する所亦四部七略の目、四十八門の名ありて、經
史子集、之を細別すればその數限りなし、これ書自體の相違な
り、商賈は利益を得んが爲に書を贖ひ、衒飾家は書棚の上を飾
らん爲に書を贖ひ、讀書子は單に讀まんが爲に書を贖ひ、好事
家は蝕みたる古本を搜し切れ〳〵の珍書を索めて其博藏を誇る、
これ善を贖ふものゝ差別なり、職として讀むものあり、文書檢
閲の官吏の如し、博渉廣聞の爲に讀むものあり、考證家の如し、
課業の爲に讀むものあり、學校生徒の如し、業務に便する爲に
讀むものあり、法律家の法律書を讀み、僧侶の經文を讀む如し、
娯樂の爲に讀むものあり、小說又は隨筆等を讀むものはこの例

也、習癖の爲に讀むものあり、學究輩の老に至るまで手に卷帙を解かざるはその例なり、これ書を讀むものゝ差別となす

職の爲に讀み、業務に便せん爲に讀み、課業として讀む者の如き、譬へば前に擧げし文書檢閲の官吏が新聞雜誌を讀み、學校生徒が課業の書を讀み、法律家が法律書を讀み、僧侶が經文を讀み、新刊批評を職とする新聞記者が新刊書を讀む類は、讀書それが各の目的なれば、何の爲に書を讀むかと問ふの要なきもその他の讀書家の爲には、書を讀むの利益、書の簡擇、讀書に就ての注意等を擧げる必要あるべし、されども此處に讀書の利益を一々擧げんは甚だ困難なり、同じ書を讀みても讀む人の心により、益をなすことあり、又爲さゞるとあり、太閤記を讀みて志を立てし人に由井正雪と今の板垣伯とあれども、二人の志と事業とは大に相違せり、又論語一部を以て天下を平げ天下を治めしといふは誇大に過ぐる言なれども、兎に角古人中にはこれにより撥亂樹定の大業を爲せしものあり、今の儒者は一生の中に幾百回論語を通讀せりとて、左までの功業を爲し終うせん人少きが如し、もとこれ等は讀書家にこれを利用する大手腕ありての上のことなれば、普通の讀書家は單に讀書より受くべき

當然の結果をのみ目的とすべきことにて、其以上の望は僭上の沙汰に庶幾し、故に若し強て讀書の利益を擧げんとならば、先づ心靈の修養、智見の廣大、娯樂の享受の三を以て答ふるを穩當とすべき也

各宗の聖典、學德並び備へし昔賢大儒の著書の如きは、吾等後進の身にとりて心靈修養の要道となり、志氣を砥勵して向上の一路を開く最好のしるべなれども、書により人によりては讀書却て累をその身に貽すとあり、或者は鼠小僧の傳記を聞きて盜賊の群に入りしといひ、又曾て新聞の記事を見しに、臺灣の一婦人は黑岩涙香の飜譯せる探偵小說を讀みて殺人罪を犯すに至りしと云ふ、魏叔子に曰く、世上書を讀むべからざるの人ある無し、賢者は固より其賢を益し、下愚之を讀めば縱ひ益すると能はざるも、決して損する所あるに至らず、然れども兩種の人あり、却て書を讀むべからず、一種機巧の人もと小慧あり、又參するに古人の智術を以てし、機械變詐百出窮まらず、人を害し身を殺すに至らざれば止まざる也、又一種剛腹の人あり、既に自ら以て是となす、之に加ふるに學問充足すれば、驕滿の心漫天塞地して、必ず一言だも受けず、一非だも改めざるに至り、

即ち身を殺さずんば已まざるに終ると、文中一種の人とは李斯と王安石とを指せしに似たるも、これ餘りに矯過きたる論なり、唯書を讀むもの多少心をこの點に致せば足れり、吾が十四五歳の頃なり、吾が故郷なる秋田の望族にして吾が祖母の妹婿に當る人あり、世に拗ねたる性なれども學問に深く、且識量も時俗を拔いて一種奇拔の見を有する人なりき、年齡は吾が父に長ずること二十四五ばかりなれば吾には祖父の年輩に當れど、如何なる故にや吾が幼き心に恰も同輩の如く親み狎れ、學校の歸途には常にこれを音問れていろ〳〵の昔語を聞くを樂としたり、

き、或日のこと、この老人吾携たる包の中の書は何ぞと尋ぬるに、吾は何の心もなく戰國策なりと答ければ、老人俄に氣色を損じ、戰國策は讀むまじき書なり、太細織江（念齋と號す書と詩を善くし藩の奉行となり後に留守居の職に在り）は才學ある男なれども、常に戰國策を喜び讀みしより、狡獪の性となり權詐信なく、士君子はこれを齒せざるに至れり、御身の年齒にてこの書を讀まんは別けて非が事なり、此後は決して讀むまじきぞと殊の外不興の顏色なれば、吾は何やらん恐ろしく覺えて草々に歸りたる事あり、この後學究の習性として手に到る書は飽

まで讀みたれども、戰國策は再び繙かず、これは敢て老人の言を守るといふにはあらねど、何となく同書は吾にとりて不快の書となれるが爲なり、この事もと一場の閑話にして以て同書を長短するにあたらざれども、心の修養の爲には機巧の書は寧ろ避けて讀まざるを可とす

佛陀基督の諸經典の如きは、その敎の信徒にあらざる者にとりても尙大に尊重すべき者たるは爭ふべからず、孔子の書の如きも亦然り、その他子思、孟子の書、希臘諸賢の著、佛門諸高僧の記述の如き、中には取捨すべきものあらんも共に讀みて利益多き書たること勿論也、四十年前の讀書子はその處世の上には獨善兼濟各々志す所を異にするも、心性の修養と志節の砥勵を以て讀書の第一義となし、註脚に拘束し文義に齷齪せる腐儒と雖も、志は尙聖賢の門墻を攀るにありて、隨つて博渉を以て寧ろその病となせり、今時の學風は之れに反し、期する所は機巧にして志す所は功利の上にあれば、心性の修養と志節の砥勵は之を爲すに道なく、殊に師友相責むるの義亦缺け、人情巧詐にして機械萬端に度れば、美性日に戕賊せられて其眞を傷はざるものなく、學者自ら發奮するにあらざるよりはこの弊救はん

に由なし、こゝに於て先聖の遺經、前賢の斷簡の如く、人心に偉大の感化を與ふるものは、現世に於ける唯一無二の救濟なり、これを讀書に於ける第一の利益となす

次に見聞を廣め智識を增すことはいふまでもなく讀書より來る利益なり、讀書はこの點に於て常に充分なる發達を遂げつゝあり、凡そ有ゆる人智の發展に伴ふて現ぜし百端の機巧は、書籍によりて世より世に傳ひ人より人に傳ふるなり、「麓草分」に廣學多聞を好で經文語錄に心をなさず沙汰の間をたのしみ何れの經如何なる錄に如此の理より此外別の事なし我佛祖の意をしりたりと意得て如此人にも授くるを本意とする人あり此の人は有爲の法をはなるゝ事かたし

敎は已に學にあらざれば有爲の法を賤むは理なれども、人生は已に一種の有爲法なり、機巧の學も病むべきにあらず、廣聞博識を努むるも亦病むべきにあらず、人たるの本意これに盡たりとなせばこそ失あれ、經世濟民といふも、厚生利用といふも、皆智術に根し機巧に基づきしものなれば、これなくて人も世も共に進み難し、故に廣聞を以て讀書に於ける第二の利益となす、さて讀書の利益の第三に數ふべきは娛樂なり、娛樂といへば其意義太だ廣く、聖賢の遺文を讀みて滿意感悅するも娛樂なれば

地口落語の類を讀みて打興ずるも亦娛樂なり、故にこの意味よりせば讀書の利益は單に娛樂に在りといふも尙可なるが如し、されど此處には唯娛樂の爲に讀書する場合をのみ指すなり、但しかく限るも亦娛樂の爲に讀書するといふ種類を制限せしにあらねば、吾人の如き學究が、修養の爲といふにもあらじ、又廣聞に資する意ありといふにもあらずして、手に任せて架上の書を渉獵する如きは、又一種の娛樂といふを適當とすべき也、これにより修養を得ることもあらん、又智見を倍することもあらん、されどもこれ最初よりの目的にあらず、吾人の意は單に讀書に在り、換言すれば讀まんが爲にこれを讀むのみ、讀みて益を得ると否とは共に問ふ所にあらず、然も天下この種の讀書家殊に多し、これを學究の性僻といふ可なり、措大の習氣といふ可なり、而して更にこれを一種の娛樂といふ豈に可ならずとせんや

さりながら讀書家が最初より或る利益を目的として書を讀まんは、書籍に對する適當の禮義にもあらねば、又讀書の上に於ける恰好の用意にもあるまじ、故に如上の利益といふも、單に讀書の利益を數ひ立てしのみにして、いはゞ讀書にもかゝる利益

はありと言ふに過ぎず、決してその利益を目的として讀書せよと勸說するにあらず、吾人他に讀書を勸めんには、單に讀まんが爲に讀めよといふ、若くは娛樂の爲に讀めよといふ、巨細に其利益を擧示して讀書宗を宣傳するはもと吾人の志にあらず、如何となれば利益の二字を拈起するにありて、ここに幾多讀書上の興味を消損するの虞あれば也

第三章　書籍の簡擇

一、簡擇上の注意

讀書上當面の第一用意は、實に書籍の簡擇に在り、言換ゆれば如何なる書を讀むべきかを決定するに在り、これ讀書家の爲には一大事に相違なきも、助言者にとりても亦至難の問題なりとす、今左に最緊最要の注意のみを掲ぐ

生物界に自然淘汰の理法行はれて、適者のみ生存の權利ある如く、書籍にも亦自存の權利あるものと否らざるものと在り、然らざれば世界は恐らく書籍の爲に埋沒せられたらんも知れず、其他にも兵亂により、火災により、又は法律の力により書籍を烏有に歸せしこと多く、今日に現存する所の古書籍古圖錄は、

當初の十分一二十分一にも足らざるならんも、尙世界中最も貧しと稱せらるゝ上野圖書館に三十萬冊の藏書あり、內閣文庫には同じく三十八萬冊ありと傳ふ、これ等の書は到底一人の力を以て其一生間に讀破すべくもあらず、こゝに於て書籍簡擇の必要起る、書籍簡擇の大綱は第一に有用の書と無用の書とを區分するに在り、第二に自己に必要の書と然らざるものとを區別するにあり、尤も幾許の力を費し、幾許の時を消し、幾許の資を投じて剞劂に附せし書籍に、無用のもの決して有るまじき道理にて、一見用に立たぬ如き書冊にも、尙作者の勞と力は相應に盡されたるものなれば、これを侮蔑することなく充分敬意を表すべきものなれども、前に述べし如く汗牛充棟の形容詞さへ尙盡しがたき多數の書冊なれば、讀書家は如何なる書に對しても尊敬を拂ふべきこと當然ながら、讀むと讀まぬとは自己の權內に屬すること故に、此處に有用無用の區分を立つる必要生じ來るなり、又天下有用の書たりとも、自己の志す所の道と相距れたるもの、又は自己の業務、嗜好、目的等と緣遠きものは、これ又省きて讀むべきものにあらず、即ち第一の淘汰にて無用の書を省き、第二の淘汰にて自己に必要なきものを除き、次にそ

の以内に於て第三の淘汰を行はざるべからず、今更にこれを細別すれば、一には讀書の目的よりしての撰擇なり、

讀書家の目的が歴史を識るにあれば、讀む所の書はこの種類に柩ふものならざるべからず、尤も史學研究と歴史の研究とは逕庭あれども、假りに史實の探討を目的とし、それが又主として東洋史の上にありとすれば、東洋史中の好著を詮索することを要す、更に又東洋史中の支那史を專攻するにあれば、これに適當の書籍を簡擇するの必要あり、支那史中の或時代を專攻せんとなれば、又それに適當せる書籍數多あるべし、詳畧繁簡の程度はその目的と學ぶ範圍によりて決定すべく、範圍の狹ければ狹き程、讀むべき書の少き道理にて、隨て簡擇も自ら寛なるべきも、若し其範圍廣ければ、讀む所の書數多くして、簡擇亦自ら嚴ならざるべからず、即ち目的よりしての書の簡擇は、研究せらるべき範圍の廣狹に隨ひ、簡擇上の手心に寛嚴の差自ら生じ來るなり

前に述べし如く、已に讀書の種類を定め、その決定通りに研究せんものは、書籍の簡擇といふも左迄困難ならず、即ち歴史家は歴史を讀み、地理學者は地理書を讀む類にて、專攻の範圍狹

き程書籍の種類も多かれば、凡てこれに渉獵するとしても亦爲しがたきに非らず、然れども同じく種類を定めての上よりの簡擇にても、その目的が全く博渉に在ることなり、譬へば畫家か畫傳畫記を讀むならば、その範圍も自ら定まり、簡擇の上にも大なる困難なけれども、若し讀書によりて畫題を得んとならば範圍は頗る大くなり、隨て何を讀むべきやを決定するさへ甚だ困難なり、歴史にも畫題あるべし、小説傳記にも畫題あるべし古人の詩歌にも畫題あるべし、かゝる目的にての讀書は、凡ての書を讀盡すにあらざればその目的を達せりとはいひ難からん

也、又讀む前に書の採否を決すべからずして讀みし後に書の採否を決すべき性質のものあり、即ち史家又は地理學者等が口碑傳説等に對する態度是れなり、これ等は沙中より金屑を拾ふが如く、始より何の事實が何の書に伏在せりとは知らずに、讀みゆく間にこれを發見するを例とす、故に豫めその讀むべき書を簡擇する如きは、到底爲しがたき事なりとす

二には時代により書類を簡擇することあり、例へば日本神代史の研究といふか、或は支那周代の學問を研究すといふの類なりこれ等は已に時代を限りたることあれば、隨て簡擇上便宜なる

こと勿論にて、神代史ならば「古事記」「日本記」の外に出でず旁求書とても「古語拾遺」「舊事記」といふに過ぎざれば「古史傳」「故事記傳」といへる如き浩瀚の注釋書を幷せ讀むとしても亦大なる困難とはいふべからず、但し讀書にはもと限界なければ尋常の程度に滿足せずに根柢まで讀破せん意氣あらば、これ以上百家の著書に出入せざるべからず、かくては一部の神代史亦一生の研鑽に値すべき也、周代の學派の研究とてもこれと同じ道理にて、孔孟老莊荀韓の書を普通の解に從つて卒讀せんは格別の難事にあらざるも、その程度によりては「論語」の一書さへ容易に解し難し、されど書籍簡擇の次第としては、先づ讀書の種類を定めたる上には、次にその時代を定むること至當の順序なり

三には書の性質のことなり、一部の「春秋」はこれを周代の歴史としても讀むべく、又當時の古文を識るに就ても讀まるべく若くは孔夫子の背景としても讀むの價あり、書に對する前、この目的を定め置かすは、簡擇上必ず不便を生じ來るべきこと也

又書の眞贋といふことも決定し置くべきこと也、古書には往々眞贋の說あれば、一家の見を以てこれを鑑別する人はいふに及

ばざれとも、然らざるものは古人の所論に聞き、大躰に於て書の眞僞を知らざるべからず、但し僞書たりとて捨て難きもの多し、もと僞書は僞書のまゝ研究すべき餘地許多あれば、單に僞書と聞きし位にて之を拋つは非が事なり、「今文尚書」「古文尚書」の並び行はれ、「舊事記」の今に於て人に讀まるなど、共に注意すべきことなり

書籍は又著述者によりて簡擇の詮義あるべし、同し日本の歷史ながら、林家の「本朝通鑑」と、水戸家の「大日本史」と、賴山陽の「日本外史」とは、史體と文體との相違のみならす、作者の理想ともいふべきものに自ら相違あり、隨て記事の採否、論贊の長短等、凡て作家自身の俤ありて、史實の正しきを得たると否との外に、著者によりて簡擇の必要生ずる也、これはいはゞ其一例に過ぎざれとも、凡ての著書皆この傾向を有す、凡そ人は如何に平心ならんとしても、其性僻、學問、境遇等に驅られ、知らす識らす特見殊想をその著述の上に現するものなれば、況して拗僻の性を有するものならば、この傾向一層著大なるべき道理なり、「鳥鳴山更幽」の古詩に反して、「一鳥不鳴山更幽」と歌へる、「勝敗兵家事不期、包羞忍恥是男兒、江東子弟多

才俊、卷土重來未可知」の小杜の烏江亭の題詩に反して、「百戰疲勞壯士哀、中原一敗勢難廻、江東子弟今雖在、肯與君王卷土來」と歌へる王安石の如き、詩の工拙と境の是非は姑らく措き、その異を立て勝を好む天性そが詩中に彷彿し得るならずや、陳壽の「三國志」なども著者の境遇よりして、却て後漢書の下に置かるゝ如き有樣なり、かくて著者によりて書を簡擇する必要明白たるべき也

以上如何なる書を讀むべきやの問題に對して其簡擇の用意を終束していへば

(一) 無用の書を省くに在り

(二) 自己の研究に切ならざるものを省くに在り

更にこれを細別すれば

一、種類によりて簡擇し

二、時代によりて簡擇し

三、性質によりて簡擇し

四、著者によりて簡擇す

されどこれ其大綱を論ぜしものに過きず、いはゞこれを書籍簡擇の總論と見做すべきものなり

二、書籍の感化

次に書籍簡擇上忽にし難きは書籍の感化なり、書を讀んで益する所あれば、又害する所なかるべからず、已に書によりて品性を陶冶し心靈を修養すといふ、その一面には性情の美を戕ひ人をして放肆邪僻に陷らしむるもの絶無なりと爲すべからず、かく書籍の感化大なるを認むると共に、其善感化を受け惡感化を避くるの手段も、亦並せ講ずるの要あるべき筈なり

書籍の感化力の淺深良否を知らんとして、これを書籍自身に求むるは徒爲なり、若し書籍自身にその惡感化の跡明白ならば、何人と雖もこれを手にするもの無かるべき筈なり、又自己の心内に省察してこれを知らんとすることも無用なり、若し人かくの如くにして其感化の如何を知り得ば、誰かその不利益なる感化を受くるものあらん、即ちこの段の省察法は、これを社會の上に觀、並せて其讀者の種類に於て觀ること也

商鞅の學術はこれを申韓に得、少納言信西入道の如きも亦韓非子の愛讀者なりしと云ふ、よりて二家の書が人心に及ぼせる感化の如何なるものなるかを知り得べき也、もと書籍は著者の學

風を現はすものなれば、其學風の社會に及ぼせる影響によりて書籍の價値をもはかることを得べく、假令へば吾邦にては、堀川派、護園派、南學派と云ふ如き皆學風にそれ〴〵特色あれば其著書にも亦著しきそれ等の傾向あり、並せて當時の社會に及ぼせる感化の上にも一長一短ありしこと明白也、又今日續刊せらるゝ各種の冊子の如き、これにより社會に及ぼせる感化の形迹を發見せんは困難なるべけれど、如何なる種類の讀者が、これを愛讀するかは容易に分明すべき也、即ち其讀者の種類によりて、その書の價値と傾向を判ずること決して困難ならず、戀愛に關する著書、成功に關する著書の如き是れなり、要するに讀書により、良感化を受け、惡影響を受けざらんとせば、大約左の如き注意を要すべし

一、詭異偏僻にして平明正大ならざる見を以て充たせる著述を避くること

二、故らに異を立て勝を好み、或は強て時世に反抗する如き著書を避くること

三、俗流の所好に投じたる輕薄の著書を讀まざること

四、慾情を挑發する如き著述嘗へば致富成功に關する書又は

輕薄淫靡なる戀愛文學の如きものを避くること

五、神怪なる小說稗史の類を讀まざること

六、甚だしく機巧に涉る諸書を避くること

かく列擧せば數限りなしと雖も、大抵これ等によりて其他を推するを得べし、又先賢の履踐せし遺範にても往々中正を得ざるものあれば、これ等も亦これを採るに就て一考を値するものなり、元來讀書は其興味の多大なると共に、其の感化も亦意外に大なれば、博涉の爲には如何なる書も一回はこれを讀破するの要あれど、讀んで其習氣に浸染せる用意まことに肝要也

三、古書と近刊書

西哲の言に、古木は焚くべく、古酒は飲むべく、古友は信ずべく、古書は讀むべしと云へり、或者は古書は陳腐たり、時代後れなり、これを讀みて何の益かあらんといふものあれども、歷史の廢せられざるによりても、古書の讀むべきものたると知らる、されども一概に古書といふも、中には一讀の價値なきもの許多あるべき也、方伎工藝の書の如きは古は寔に今に及ばず、かゝる種類のものは、進步せる科學によりて說明せられたる今

の著述に賴るを利とすること固より也、凡て智術と匠心を役すること多きものは、百年前の著述よりも百年後のものを取るべく、去年の著述よりも今年のものを取るべく、甚しくは前月の著述よりも今月の出版によること、量に於ても質に於てもひとしく大に且つ精しきものならん、但しこれ人間機巧の書に就ていふのみ、「論語」以下に「論語」なく、「聖書」以後に「聖書」なく、王陽明の「文錄」以後に「文錄」なし、古酒は醇正にして悍烈の氣なきを尙ぶ、古書亦然り、平明正大なる處、簡易卒直なる所、古朴眞醇なる所、一點賣弄の氣なき所、勝心なき所ひとり取つて法となすべきのみならず、無限の尊敬を拂ふべき價値亦こゝに存す、今の書もとより讀むべし、然れども古書決して棄つべからず

古書には目錄あり、解題あり、批評あり、以て讀むべきものと讀むべからざるものとを分り易し、近刊の書は新聞雜誌等にその批評あれども、多くは信憑しがたきものなり、其他出版月報の類なしといふにあらざるも完きものに至つては至つて少なり即ち其採否を決すること、讀者にとりて決して困難ならずとせず

第四章　讀書法

一、讀書法の第一義

思想を文章に現はすは已に思想の上の一厄なり、如何に文章に練達せし人にても、自己の思想を遺憾なく文字の上に現はすは極めて困難なるべし、思想には思想の方則あり、文章には又文章の方則ありて、この方則互に相一致せざる上に、文字は前人の創設せしものなれば、これによりて自己獨創の意見を發表せんとすれば、勢ひ增減加除する所なきこと、能はず、これ已に作

者の爲に思想上の一大桎梏なるに加へて、一語多義に涉ること多き文字を假りて、前人未道の言說を著はすに於ては、假令作者の用語例を新設するとしても、尙讀者を迷路に誘ふの嫌なきこと能はず、まして、この用語例なきものに於てをや、今古今に涉りて前人の著述を概涉すれば、作家各々に自己所定の文例ありて、その當代には又時代所定の文例あるを見るなり、されば後人にしてその著述を讀むものにありては、先づ其の時代を通じてこゝに其文例を假定し、更に其著者自身の文例を特定し、これによりて前人の意を忖度せざるべからず、これ尤も完全に

近き讀法なれども、何人も必ずかゝる勞を親する能はざるべく又この例によりたりとて、必ず瑕瑾なしに、即ち前人の意の如くこれを解し得べしとも爲し難し、故に書籍の簡擇も一大事なれども、讀法に至りては更にこれに倍したる困難事といふべきも也

讀書法の第一義は、著者の思想通りに其書を解することなり、故に文字を異にする國の書籍を解するは困難なること勿論ながら同じ國、又は同じ文字の國の書籍にても、時代の遠く隔たりたるものはひとしく困難なり、又たとひ同時代にても、艱深不

曲の思想を晦屈の文字に寓せしものは、他の平明なるものに比して其解意の難きは一倍なるべし、事實已に此の如くなれば、讀書法の第一條は、主として讀書力を養ふの一事に在り

二、讀書力の養成

讀書力の養成は全く練修の力に在り、然して今時の學生は概して讀書力厚からずと稱せられ居れり、今中學校卒業程度の學生を檢すれば、書籍に對する理解の力の薄きこと殆んど意外なるが多し、これ課業の多端なると、良敎師多からざるとにあるこ

となれども、主として學生自身が練修の効篤からざるによると也、聞く所によれば或中學校にては、「經商」を經文賣りと解し、「感陽宮殿三月紅」を陽春三月桃李花開ける形容なりと生徒に授けたりといふ、かゝる教員の下に在りては學生の讀書力決して增すべき筈なけれども、これとても自修次第にて如何樣にも進歩せまじきものにあらず、三十年前の教育法は、菽麥をも辨へぬ兒童に四書五經文選等を課し、錬習の力を籍りてこれ等難解の書を容易に讀ましめたるが、その兒童の心身上の發達に對しての利害は知らず、單に讀書力の上よりいへば、今の學校教育に比して數倍以上の好果ありたる也、吾人が今現に漢唐の古書に對して多少の理解力を有すること、實にこの非科學的なる教育法の賜ものなりとす、然らざれば二十年の教育、總に淺薄なる新聞文章を解し得るに止りしやも知るべからず

已に讀書といふ、若干の讀書力ありてのこと也、然らざるものは先づ讀書力養成の爲めの故に讀書せざるべからず、これに就ては師に從ふを以て尤も便益の方法となす也、元來字書によりて書を讀むは已を得ざればなり、且つ字書によりて解し難きものあり、解し得て正解を得ざるものあり、又字書といふも節用

集の類なれば格別なれども、稍々完全に近き字書なれば、字書の引用といふことさへ、尙若干の讀書力を要することなり、何れ、より、しても、師に、就くを、以て、讀、書、力、養、成、の、第、一、捷、徑、となす、若し已むを得ずして獨學の困難を忍ぶとせば、最良の字書を伴侶となすことに繫念すべし、當初浸染せし習氣の一生蕩掃し得がたきが如く、初の誤解は時に終生の誤解たることあり、師を擇ぶにも、字書を擇ぶにも、この一件の用心を肝要となす

近來學生が漢文を講習する階梯としては、往々「近古史談」「日本外史」「文章軌範」等を讀むを例となせとも、これ讀書力養成の爲にも、又は文章を學ぶ上にも、共に書籍の採用を誤りしものといふべし、「文章軌範」はもと謝疊山の撰なれども、其編述の主旨已に擧場の貢生に便にするにありて、一般の讀者の爲にせしにあらず、尤もその撰ぶ所單に科場用としては出入する所多けれども、本意已にこゝにあらざれば、これを讀書力養成の手段に供せんは不適當なり、「日本外史」「近古史談」の如きに至つては邦人の著述なり、譬へば如何に好著述なりとて、其文に幾多の破綻あるべし、況んや「日本外史」の如きは日本の歴史としてさへ其價値如何なるべき、即ち頼氏一家の文章と識見を知

らんとするものに取りては多大の興味あれども、讀書力養成の爲には斷じて讀むに値せず、「近古史談」の如きは更にいふに足らず、若し「近古史談」を讀むの時間あらば、寧ろ寺門靜軒の「江戸繁昌記」を讀むに若かざる也

讀書力養成の爲の讀書なれば、古文はこれを古書に取るべく、決して擬古文に取るべからず、漢文はこれを支那人の著述に取るべく、決してこれを邦人の書に取るべからず、即ち加茂眞淵一派の擬古文を讀むに力を勞せんよりは、直に「古事記」「萬葉集」を讀むを利とすべく、物門の擬古文、乃至栗山、山陽、一齋、息軒、宕陰の文を讀まんよりは、直に經傳百家の文、乃至韓柳歐蘇の著述を讀むを勝れりとす、古文を模すといふは已に一遊戯なり、假令嘔心の餘に出でしといひながら、模するといふのみにても其眞を得ざること明かなるべし、且つ一時代の文章を其時代の大思潮が磅礴せし結果とすれば、一作家の文章は其思想の一派一脈と見做さるべく、其語氣といふも、文勢といふも將又語法文法といふも、同じくこの思想の鎔陶せられし範型なり、故に學ぶといふも或程度のことなり、摸するといふも亦或程度以下のことなり、其結果は貌似すれども神肖せず、優

孟衣冠、大家の笑を取るに過ぎず、さりとて懸門物門の文を廢すべしといふにあらざれども、これ他の目的もて讀まるべきものなり、讀書力養成の爲には斷じて讀むに値せず

學不在多要在精之　孔叢子

三、訓詁を正す

讀書力養成の爲には固より、凡て初級者の書を讀むに當り、第一に注意すべきは書籍の訓詁を正すこと也、然るに讀書家動もすれば書は大意を領せば足るといひ、或は活眼活書を讀むといひ、凡て訓詁を正すことを嫌ふて卒讀濫讀するもの多し、これ實に避くべき事なり、元來書は大意を會せば足るといふは、已に讀書子の分限以上の言なり、經世家のことなり、達人の達觀せる言なり、若しも讀書家たるを屑とせずは、これを高閣上に束ぬるも可なれども、苟も讀書家として書に忠實ならんとせば、其一字一句も輕忽にせず、仔細に訓詁を正すべきことなり況んや讀書力養成の爲に讀書するものに於てをや、且つ最初粗畧に書を讀む惡習慣を得るに於ては、その病沈痼となりて癒へず、遂に書の眞意義を解し得ざるに至り、書籍と日夕相周旋す

るも、白頭尚新なるが如く、生面の人として終始すべきなり、かくて何れの處に其讀書力を得べき、もと讀書力とは書を解する力なり、然して訓詁は書を解する必由の逕路なり、已に訓詁に熟する以上は卒讀又は活讀も心のまゝなれ、書の訓詁さへ解し得ずして如何でか深艱なる文義を解し得べきぞ、假令天性慧敏の人なればとて、書を讀むには必ずこの訓詁より先にすべきこと、もと自明の道理なり、今未熟の身分を以てこれを輕視し直に文義の大要を會するといふに至つては、沙汰の限りなり、僭越至極なり、讀書子輕薄の氣習もこゝに至つて極まれりといふべし

已に訓詁を正すといふ、これ最喫緊事なればなり、されども甚だしくこれに拘泥するを要せず、もと訓詁を正すといふは、榛莽を芟除して坦途に就く心なり、先きに字義を解して後に文義を解することなり、訓詁即文義にあらず、訓詁を識るは直に其書を解せしにあらず、訓詁已に最要事なれども、書には訓詁以上其所に文義あることを知らざるべからず、即ち訓詁を正すは文義を正す所以にして、訓詁實に本にして文義却て末なるには非らず、若しこの根枝の分を辨へずして、一生注疏の書に埋頭

する如きは勞して功少きのみならず、却て讀書の本義を遺却せるものといふべし、故に訓詁は正すべきもこれに拘泥すべからずといふなり

四、古文古義

訓詁は學問の末節なれども讀書の要道なり、訓詁によらずして書は讀むべからず、わけて古書に至つては、日本も支那も、共に今文と隔たる所多ければ、古書古文を讀むには主として古義によらざるべからず、但しこゝに古義といふは、王李二家の說又は蘐園諸子の所謂古義といふにも當らず、加茂本居二家の古言といふ義と限るにもあらざれども、古文にはその時代の意義ありて、今日常使ひ慣れたる意義もて、直に之を解せんには時に愆失なしといふべからず、物茂卿その著「辨道」の書に曰ふ

（前畧）然れども是の時に當り孔子を去る未だ遠からず流風尙存し名物爽ばず唐の韓愈の出づるに及び文章大に變しこれより後は程朱諸公豪傑の士と雖も古文辭を識らずこれを以て六經を讀みて之を知ること能はず獨り中庸と孟子の讀み易きを喜び遂に其外人と爭ふ者の言をもつて聖人の道の本然と爲ず又今文を以て古人を視而も其物に昧し物と名と離れ而して後義理孤行し先王孔子の教法復見るべからず近歲伊氏亦豪傑なり頗るそのこれと似

たるものあり然して其孟子を以て論語を解し今文を以て古文を視ること猶程朱の學の如き耳（中略）又未だ和語を以て華語を視ることを免れず我その所謂古義なる者を讀むに豈に古ならん哉

云々と、物子の說の中ると中らざるとは今問はず、今文を以て古文を視るの弊は昔も今も多く在るなり、卑近の例を擧ぐれば「絕倒」の二字は捧腹鼓掌の字面とひとしく、共に大笑の樣を形容せし意義として使用せられ居れと、古書には必ずしもその義に使用せざる也、例せば晉書の衛玠傳には王澄每に玠の言を聞けば輒ち歎息絕倒すとあり、又魏書の李苗傳には、苗周瑜の傳を覽る每に、未だ嘗て咨嗟絕倒せずんばあらずとあり、この兩書は共に絕倒を傾倒の意に使用せり、北史崔贍傳に、贍陳に使して、彭城を過ぎしとき、道旁の碑を讀みて未だ畢らざるに絕倒すとあり、又隋書陳孝意傳に、孝意父の喪に居り朝夕哀臨、一聲を發することに未た嘗て絕倒せずんばあらずとあり、この二書は共に絕倒を悲愴極る處の意義に使用せり、然して絕倒を今日使用の意義に用ゐし始は、五代史晉家人傳にあれど、宋史王登傳には、尙忽ち絕倒五臟に血を出して卒すとあり、又元の趙秉文の詩に「不敢上高樓、惟恐愁絕倒」などあれば、歐陽公

以後と雖も亦種々の義に使用せる如し、以上は趙雲崧の「該餘叢考」によりて抽出せしものなれども、其他「三國志」劉玄德の書に漢室絶倒の文字ありしと覺えたり、この二字さへ纔に數百年に亘りてかく多樣の意義に使用せしなれば、千年以上の古書を讀む用意の、愼重たらざるべからざる理由は自ら明白ならん、古文別に古義あり、斷じて今文を以てこれを讀むべからず

五、著書の時代

書を讀むはひとり書中の文字を讀むにあらず、其文字を通じて作者の理想を知ることとなり、又獨り作者の理想とする所を會得するに止らず、其理想を通じて更に作者の時代を知ることとなり曠世の大人物はよく時代を動かし、自己を時代の中心に置いて旋轉の大機をその手中に握り、心のまゝにこれを上下し左右するを得べしと雖も、蝦跳るも斗を出でず、尙其時代の圈外に逸出せんは難かるべし、ましてそれに及ばざる人々をや、故に基督も時代の子なり、佛陀も時代の子なり、孔子亦時代の子なり山高しとも天を拔くに至らず、大人物を包容して餘りある時代は、それだけ其人物よりも大なる道理なり、されば著書の上よ

りすれば、即ちその時代より見て柔順者といふも、又反抗者といふも、共に心無くしてその時代の兩面を現はすなり、言換ゆれば時代は物の兩端相容れざる如き相反の言説を、同時にこれを包容して戻らず、二者は各々其特相を有しながらも、亦ひとしく時代の殊色を離れざる觀あるなり、されば凡ての著書には作者と時代との二色を有せり、孔孟の書と老莊の書は、其説くところ氷炭相容れざるにもせよ、同じく周代の特相を帶びし一事は相爽はず、讀書の興味は全くかゝる邊に在る也

されば書を讀んで其時代を知らざるは、興味の一半を殺ぐにひとしく、又利益の一半をも殺ぐといふべきなり、のみならず其書に對して、全く半知半解の位置にあるべき道理也、書を解するといふは一に作者を解するなり、二に時代を解するなり、「春秋」を孔子の背景といふも、孔子の背景たる周代を解するに、「春秋」の一書最もこれに適したればなり、時代に順應するか反抗するかの一なるべき凡人は固より也、時代に卓立したる偉大の人物さへも、尚この背景の前に立ちて首を振り手足を動かしつゝある俳優のみ、かくて時代の力の極めて大なるを知ると共に、それが此の如き人物を產し、此の如き理想を生み、此の

如き著述を出せるかを探討して、はじめて滾々として盡きざる大思想の活源の所在を明らめ、曩きに芥滯せる群疑の釋然として氷泮するを覺ゆるに至るべし、讀書の興味は又實にこれ等の點にあるべきこと也

偖その時代に傑出せる人物、言換ゆれば當代の代表者ともいふべき人は、力を事實の上に現して文物制度となり、思を心志の上に潛めて學問著述となる、この在朝者と在野の人とは、常に其意見に一正一反ありて相合致するに到らず、假令へば管晏二子の著を在朝者の言とすれば、孔子はまさしく在野の代表者なるべし、又在野者の中にも、孔子を其正位にあるものとすれば莊子はまさしく其閏位にあるものなり、一は北人特有の實際的學問を表示し、一は南人の氣質を受けたる飄逸輕浮の思想を代表す、孔子の見は後に儒學の根元となり、管晏二子の說は功利家の祖となり、莊子は莊學の源をなせる等、其道相繼て百世廢せざるも、これ等の人の所見所學といふべきものは、同じく其時代の大思想に發源せしといふも可なり、其孔子となり、莊子となり、管晏二子となりしは、適々觸るゝ所同じからざりしのみ、又人格の大小高低にも繫ること也、而してひとしく時代の

子たるに於て異同なし

この故に、時代と著書と相關渉する點に向て、仔細にその一隻眼を開くを要す、これを活眼よく活眼を讀むといふ也

六、著者の人物

著作が時代の影響を受る所以の理は前に述べたり、次には著作と作家との關係をいふべし、されども是れ多言するの要なき也、著述は作者の咯血嘔心の餘なり、故にその書は作者の自現なり、その長所も短所も、善き點も惡しき點も、ひとしく掩ふ所なく、これに現はる、然し文字は言語に比して推敲の時間あり、又修飾の餘地あり、故に元遺山は、「心畫心聲總失眞、文章寧復見爲人、高情千古閑居賦、爭信安仁拜路塵」と歌へり、如何にも潘安仁か閑居の賦を讀みては、逸氣高情千古の上に超絶し、同じ人の曾て權貴の後塵を拜せし大醜事あるを覺るに由なし、文といふ文字は已に幾分修飾の意義あれば、醜きことも美はしく、拙なきことも巧みに、雕繪の詞を以て其本質を覆ふにありとも解せらるれとも、好問詩中の事實は寧ろ例外に屬すべく、鄭板橋の所謂直に血性を攄して文章となすこと、彼の俠語とのみ見

るべからざる也、故に一字一句千槌萬錘して人間工匠の極を窮るも、遂に其本眞は掩ふこと能はず、何れの地には許多の破綻を露はすに至る、されば文は即ち人なりと解して大なる乖違なし、これ其書を讀んで其人を識る一の興味也

凡そ有道の人と雖も時に一念の微は邪路に入らずといふこと有るべからず、又道心なき輩と雖も時に一念の微は正道に入らずとも定め難し、著述はもと靜思默想の餘に就り、眼を過ぐる刹那の光、耳を掠むる瞬時の響にあらずと雖も、亦必ずしも其人全副の神を寫すのみに止らず、時には胸臆の底に潜める刹那の光、瞬時の聲ならずといふの理なかるべし、故に曹瞞の詩に婦人の言あり、花蕊夫人の詩に髯鬚の氣あり、これ其書を讀みて其人を解する二の興味也

著作を通じて人物を解するはもと一種の興味なるに相違なし、されどもこの事亦書を活讀する一要件たり、「史記」は司馬遷の人物を知りて後に初めて解せらるべく、「三國志」を讀むには陳壽の人物境遇を知らでかなはぬ事なり、「五代史」の苛酷なる論斷は歐陽公をかれて宗人の氣習を知るべく、山陽の「外史」はよりて時代と其人となりとを見るに足る、これ作家と著述とに

於ける讀者用意の一端なり

七　卒讀と再讀

書にはもと卒讀すべきものと卒讀すべからざるものとあるべし訓詁に經意すべき點少きものは卒讀に宜し、一氣に卒讀するときは、一句一章は全く記憶の外に逸し去るも、全篇の要旨は却て讀者の眼中に留ること、一隅に失ふも全局に取る所あるが如し、かくて再讀三讀せば、書意瞭然として吾が心に徹す、卒讀の利は、書中の局部と局部との連鎖にあり、先の記憶と後の記憶との連絡にあり、朧氣ながら全篇の大意を心圈內に描出し得るに在り、若し今日其第一葉を讀み、明日更に其第二葉を讀むに於ては、部分の文義明なるも全篇の文義明ならずして、これを章句に得て却て主意に失ふ虞なくんはあらず、されども左の如きものは卒讀し得べからず

(一)訓詁の多義難解なること
(二)文義の艱澀にして明瞭ならざること
(三)行文の結屈贅牙なること
(四)卷帙浩瀚にして一氣に卒讀すべからざること

(五)意長く旨遠くして含咀するに宜しく誦讀するに可ならざることと

故に卒讀すべきものと然らざるものとは、書の性質によりての差なり、乃ち書はすべて卒讀すべしといふは、書は大意を領せば足るといふ英雄者流の見のみ、決して讀書子の言ふべきことにあらず、但し讀書百遍すれば意自ら通ずと云へる格言と、書は卒讀すべきものなりとの言とは、相似て其間に逕庭ありと知るべし

書は卒讀すべきものか否かは、其書の性質によりて定まるべき問題なれども、如何なる書籍も再讀又は三讀すべきだけは明白の理なり、若し再讀の要なき書ありといはゞ、これは恐らく一讀の要もなき書籍なるべし、已に一讀の要ありとすれば、必らずまた再讀の要あるべき筈なり、人の記臆は如何に牢しとするも、一讀にて不充分なるは吾人の經驗これを證する所也、一讀再讀より三讀するに及びて初めて牢然拔けざることを得べきのみ、その一たび眼を過ぎて直ちに讀を作すといふに至つては、これを一の奇蹟と做すを可とす

昔人謂、造化勞我以生、逸我以老、今人當年富力强之時、玩日愒月、飲食

戀樂、有書不讀、有子不教、是當勞而反逸也、及其筋力既倦、血氣既衰、終日營求、爲子孫作牛馬、是當逸而反勞也、其違天甚矣　謝肇淛

第五章　書籍の購入

一、如何なる書を購ふべきか

人に若干の餘資あらば、知らず如何かこれを消費せんとするぞ酒色の爲にこれを拋つは已にいふに足らず、田宅を購ふて子孫の謀を爲すこと、尙徒勞の爲たるを免れず、若し窮措大稱身の望をいはゞ、これを以て書冊を購ひ、風簷に展披し、よりて餘生を樂むこと也、天祿石渠の富、幾宵か吾夢裡に入りてその艶羨の情を充たしたることぞ、纔にこれを筆にするも、尙口腔裏津々として液を生ずるに至る、膏肓の痼疾憐むべきかな

書を讀むと書を購ふとは別事たり、購ふて讀まざるものあり、讀みて購ひ得ざるものあり、然れども若し購ひ得ばこれに增したる仕合なし、讀みて購はざるは購ふことを欲せざるにあらず實に購ひ得ざれば也、讀書はもと人生唯一の事業といふにもあらねば、如何なる需用をも廢して盡くこれを讀書の資に供すべき道理なし、まして書は購はざるも尙讀む便宜あり、貧しき讀

書家は、家によし一萬卷の書を畜ふること能はざるも、圖書館に出入して致し難き奇書を手にするの幸福あるなり、さはれ一家を構ふる程のものは、もと家に若干の書籍を藏すべき筈なり貧富によりて差こそあれ、已に一家をなす以上、調度器什あるべし、衣服粧飾の具また絕無といふべからず、加ふるに床間には書畫ありて懸るべく、榻上には扁額ありて横はるべし、獨り机上に幾卷の書冊なしとするを得んや、書冊は決して粧飾に供すべきものにあらざれども、粧飾用として存するは尙なきに勝るならんか、わけて富人の生活として、紳士の躰面としては、元明の湘黄は宣德の古銅爐と共に、室内の珍たるべきこと也、讀むと讀まざるとは姑らく問はず、此の意味にて何れの家宅にも相應の藏書あるべし、家に藏書なきは其主人に書卷の氣なくして市俗の氣滿面なることを表はし、その美ならざる標號となる虞あり、吾人は藏書家則讀書家なりと速斷するにあらざれども、家にありても人にありても床しきは書冊なり、窓外四五竿の竹、机上六七卷の書、一味の清風こゝに生ず

今若し如何なる書を購ふべきやの問に接するとせば、吾人先づ其紳士としてなりや、讀書家としてなりやの區別より之を明に

せざるべからず、讀書家としてならば讀書家としての用意あり紳士としてならば又紳士としての用意あり、學者は學者の身分學生は學生の身分として、先きにすべきもの、後にすべきもの各〻大差あれば、一概にこれをいふこと難し、然れども大要の注意ならばこれを說くに容易なり、元來讀書家としてなれば、先づ其費に裕ならざるものと豫斷して可なるべし、故に價高き浩瀚の書は到底これを購ひ得べくもあらず、これ等は凡て圖書館に就て閲覽すべき事とし、差向き急とする所は、日夕座右に備置くべき必要ある書冊なり、即ち字書を第一とし、之に次ぐは其專攻の學科に屬する參考書たるべし、其他は人々の心仕せとする外はあらじ

二、購入に就ての注意

書籍を購ふに就て第一に注意すべきは、其價の廉不廉にあらずして、誤版、落丁の有無なりとす、價如何に廉なればとて、誤植多く、又は落丁あらば、價高くして然らざる者に劣ること大なり、故に活字本よりも版本を購ふに利あり、又寫本にても字體鮮明にして讀み易きものは、却て版本よりも便なること多し、

新本は版を重る程完全に近きものなれど、古本は寧ろ古版に長所多きことなり、但し一概に然りといふにもあらざれば、版の善惡等よく〳〵詮索の上、これを購ふを可とするなり、買急ぎて惡本を手に入るゝは、まことに詮なき事と知るべし

机上の飾としては唐本の方體裁頗る宜しけれど、唐本には惡本殊に多ければ、和刻あるものは可成和刻本を購ふを可とす、二十四史中にも大抵は和刻あり、佩文韻府、本草綱目、康熙字典等皆和刻あれば、外觀の善惡を以て唐本を購ふは太だ非なり、又巾箱本は携帶に便にして其價廉に、且誤植少ければ、之を購ふて利多きが如くなれども、其文字細くして視力を害すること太なれば、寧ろ其價貴しとても大本を購ふこと也、「正續皇清經解」、「淵鑑類函」、「子史菁華」、「困學紀聞」、「經籍纂詁」等の縮刷本は實用に堪えぬ程にはあらざれども、讀書家は主として視力を愛護する必要あれば、可成これ等の書を使用せざるを可とす

新本よりも古本を好むは人情なれど魯魚焉馬の誤少き點に於てこそ古本を取るべきなれ、何の理なく、只管に古本を愛好して、清初の刻より明本を喜び、明版よりも元版、宋版を喜ぶといふは、已に一種の骨董癖といふべきもの也、和刻にても慶長版を

珍重するなど同じくこの癖なり、足利學校の藏本の貴重なるは彼土にさへ希有の古本あればなり、單に年月を經ること久しかりしによるにはあらず、この骨董癖は事に害ありといふにあらざるも、讀書家は斷じて爲しまじき事なり

次に書を購ふには、その保存の適否に就ても亦一考すべきことなり、和刻の唐本に比して保存上耐久の實あるはいふまでもなく和裝の洋綴に比して同じく堅實なること亦明白の事實なり、殊に竹紙と稱する惡紙に刷りたる新渡の唐本は、雨蝕虫害共に甚だしく、誤版惡刷比々相接するを覺ゆ、故に唐本にても可成古渡本を取るべく、然らざれば白紙刷又は石版太字本等の、紙質良く印刷の鮮明なるものを取るべきこと也

汝讀四書無甚心、得由不能虛心涵泳、切已體察、朱子教人讀書之法、此二語最爲精當

曾國藩與子書

第六章　書籍の保存

時月の悠久なるに比しては、物の澌滅亡盡は電よりも疾く消え泡よりも速に泯ぶ、壽なること金石の如きさへ、雨に淋がれ土

に蝕されては、一千年の故物往々影さへとゝめず、まして紙を以て肉とせる書籍に至りては、其亡滅人の一代よりも早きとあり、如何ぞよりて子孫學問の資となすべきを得んや、されども若し心を保存の上にとゝめ置かば、十年の壽は二十年に、五十年の命は百年までも延くことを得べく、一には其紙質と釘裝の堅固とにも因ることなれども、宋版の書の今に傳へて缺殘せざるは、主として保存に心を用ゐし結果なるべし、物質の性は有限と定りたるものなれども、書籍の如きは他の器玩よりも一層篤く心を用ゐ、吾より吾子に、子より孫に、一經傳繼して清白の家風を傳へしめたきものなりとす

水火戰亂等の災に遇はずば、多少の心だに用ゐなば書籍は存外に壽命永し、然も書籍保存上の用心は左の二點にあるべし

一、書籍の散佚を防ぐこと

二、書籍の汚損を防ぐこと

書籍の散佚に就ては、天災及び戰亂などの變故は例外としても尚一家の事故多きと、家を移すことの數々なると、他人に貸して失はると、これを賣りて急を濟ふと、凡て良からぬ機會は少きにあらざるべき也、已に散亡せしものに執着するにも及ばざ

れど、若し些少の注意を拂ふによりて、幾許なりとも其損害を少くすることを得ば、これに倍したる幸なかるべし、今左に一二の用意を示さん

(一)天災又は戰亂（これは無かるべき事ながら）に際會しては、生命は貴重すべきもの丶第一なれば、假令自身は無難なるも、父母在すべく、又妻子もある身にては、藏書などに懸念すべき餘裕或はなからんも、平素の用意次第にて或は家眷と並せて無事なることを得べき事あるべし、左なくとも火災に罹りし時の如き、一家は無事に避難し、重なる衣服調度も凡て搬び出せるに、獨り書籍のみ其用意なかりしより運搬すること能はず、よし其一部を救ひ出すも、それは凡て殘簡破篇にて、其勞だも償ひ得ざるとなり、これ必竟平日これ等の難に會したる時の用意缺けたる也、元來書籍は性として散佚し易きものなれば堅固なる書箱に納め置くべき筈にて、その書箱も亦、これ等の注意よりしては、大さと重さとが、一人にて容易に運び出すに適する程度ならざるべからず、重量なる洋綴の大書籍を、堅固なりとも極めて大なる洋書棚に藏する如きは、常の保存には適するも、不意の變災には甚だ都合惡し、故に書籍の大と重量とは、婦人

小兒の力もて搬出し得る如く爲すを最も必要の用意となす也

(二)一家の變故に際しては、もと重大なる患難の父子、又は同胞の上に繫りたる時なるべければ、何人も藏書の始末などに考及ぶものあるまじく、よしや書籍に忠實なるも、却て父子の愛、同胞の義に缺くる所あらば、是れ一を得て十を失ふ道理にて、かゝる場合には產を忘れ、身を忘れ、一家力を合せてこれに處するこそ道なるべけれ、故にこの際書籍の散佚といふ如きは、もと恤ふるに足らざれども、若し心をこれに及ぼす餘裕だにあらば、義に缺くる所なき程度に於て其保存を圖ること肝要なり

如何に父子兄弟の身にかゝる災害なればとて、周傷狼狽してはなにの詮なかるべく、かゝる一分の餘裕は、吾も人も亦無かるべからざる事たる也

(三)數々家を移す人にありては、家を移す度毎に器財を亡失する人あり、凡て家を移すは多く匆卒の際なれば、更に一段の注意を要すべきことなり

(四)他人に貸與してその人に失はれしは、もと已むを得ざる事にして、これが爲に嚴に禁じて人に貸さずといふは非が事なり、元來書籍を重ずる人なれば、他人より借れしものは一層これを

重ずべき筈なるに然もこれを失ふといふに至りては、萬已むを得ざる事情ありてのことか、然らざればその借れたる人は書籍を重することを知らざる人なるべし、書籍を重ぜざる人、及び他人の物を借りて適當の保護を加ふることを知らざる人は、もと論外なり、かゝる人の爲に失はれしは、これを天災の一と見做すべし

第二に書籍の汚損を防ぐには、左の注意あるべきこと也

一、書を讀む時の注意

二、書を藏する時の注意

書を讀む時の注意は、いふべき程のことなし、いはゞ書籍を汚損せずといふ迄の事なり、書を藏する時の注意といふも、雨蝕蠹餐を防ぐことだけなれば、大抵左の數項にとゞまるべし

(一)一年中時期を定めて曝書すること、普通は暑時になすを例となせども、曝書は年中尤も空氣の乾燥せる月を擇ぶを利となせば、却て十月頃はその好時期ならん

(二)曝書は一年一度、又は二度なれば、到底十分の効なしといふも可なり、故に平日、書籍は可成外氣の流通よき室に置き、且其製造も、堅固といはんよりは寧ろ通風に便なるこ

とに注意すべし

(三)蠹蝕を防ぐには以上の手段の外、樟腦を書籍中に藏する亦一法なるべし

(四)人の住まざる家ははやく敗壞し、人の讀まざる書ははやく破損す、故に藏書は年中間斷なくかわりがわり讀むに若くはなし、これ唯一の保存法也

第七章　藏書家の注意

一、排列方法

百冊二百冊の書籍なれば、これを書齋に横陳するも差支なかるべきが、其數次第に多くなりゆきて一萬二萬の數に上れば、書籍排列の方法は、第一に藏書家の心を累はす問題となるべき也若し圖書館の如き大組織なれば、建築も、器什も、使用の人數も、凡て書籍の排列と保存上より打算して案出するなれば、排列の方法に苦しむことなかるべきも、普通家屋の一部を書齋に充て、又これを同時に藏書室となす吾人讀書子の生涯にありては、藏書の多きを努め、其數の加はるを喜びながらも、一面には常にその始末に苦心しつゝあるなり、若しこれに就て排列の

原則ともいふべきものを作らば、宜しく左の如きものなるべきか

一、體裁よりすれば書籍の大小により排列するを可とすれども、便宜上よりすれば其部門を分ちて排列するを可とす

一、書籍は凡て其背を前にして竪に列すべし

一、書籍の小口には盡く書名と卷數を記し置くべし

一、書籍は竪に積重ねずして、これを横に排列すべし

一、書籍と書籍との間には、少しく空隙を存し置くべし

一、抽出したる書籍は、讀終ると同時に必ずこれを故處に還すことを忘るべからず

二、書籍の分類

書籍の分類法は許多あるべし、製本の種類によるも一法なり、著書の名になるも、一法なり、イロハ別となすも一法なり、部類別となすも亦一法なり、但し圖書館の如き大多數の書籍を藏するものなれば、イロハ別、五十音別は最も適したる分類法なれども、一家の藏書其數多くとも一二萬を出でざるものは、却て部類別となすこと利益多かるべし、されどこの部類別といふ

も、實際は往々何れの部に屬するや判別に苦しむことあり、古事記は一面は歴史にして一面は神道上の秘典なれば、二者何れに屬すべきかは、ひとり其書の性質を以てのみ斷すること能はず、又安齋隨筆の如きは、書の體裁は隨筆なれども、内容は有職故實の書なり、これも亦分類に苦しむものゝ一なり、これ等は凡て藏書家自身が其抽出に便なる如く、後に其分類方法を決すべきものなるべし

三、目錄の編成

藏書家は又目錄の編成を忘るべからず、目錄の編成は其勞大なりと雖も、藏書家自身にとりては一種の娯樂といふべきものなり、又これによりて書籍蒐集の苦辛をも明に認め得べく、且その散佚を防ぐ一種の方法ともなるべし、若し幾多の異本珍書を藏し得ば、更に其解題書を造り、以て後世の讀書家を資益するの義務あるべきこと也

四、藏書家の德義

藏書家は骨董家と同じからず、骨董家は以て自己の嗜欲を充た

すに過ぎざれども、藏書家は唯學問に資益するが爲に書を購へしものなり、若し抽出隨讀の便宜さへあらば、其書は自己の有たると他人の有なると共に問ふを要せざるべきもの也、珍異なる古書の零本を撫玩して自から喜ぶ如きは、これ讀書家にあらずして骨董家なり、藏書家は身自ら讀書家たらざるべからず、然らざれば世の讀書家の爲に、自己の藏を盡して其用に便せざるべからず

或点よりいへば藏書は一種の蓄財なり、世人と共に享くべき讀書の利益を、自己獨りこれを專有するに就て、小民を誅剝して吾が富に誇る富豪と擇ぶ所なし、故に富豪が貧民に施財する義務あると同じく、藏書家は人に貸して讀ましむべき又義務ある也、まして富豪の施財は財に失ふて德に得るも、藏書家の貸書は財德共に得るに在り、かゝれば藏書家は天下第一の幸福の人なりといひ得べし

示諸生

世之學者莫不讀書而善讀書者天下鮮矣余謂讀書之法朱子之二語盡之曰嚴立課程寛著意思嚴立課程則日有進益之効寛著意思則常有咀嚼之味何謂嚴立課程凡讀書當以其所讀之書爲一件事業方讀此書時不知復有他書日夜汲汲專心積慮至於始終貫穿本末無遺然後更替一書讀之如

前是其法也何謂寛著意思凡讀書忌於急迫其必熟讀詳味以究其精沈潛反復以致其深或有疑而未通則宜優游涵泳以待他日積功而自得之不可穿鑿以求强通是其法也學者之患在貪多務得用意不專今日讀一書未半明日又讀一書泛々然意廣慮分所讀書皆不精焉一爲俗事所碍曠日束之閣上如棄忽復起念及此又窮日之力而急讀之亦不過涉獵經史玩愒載籍以博洽自多而已其於義理何所得乎又安取於讀書乎也之稱通儒者其學多如此可嘆也夫

第二編　國文學書の研究法

第一章　一般の要領

文は道を載する器なり、上古より近古に亘りて、歴史、文學の有ゆる研究は、先づ一と通り國文學を修めての上ならざるべからず、故に國文學專攻の人は勿論なり、その他の人々にても、本朝の歴史、文學に就て、一片の智識を得んには、勢ひ國文書の若干を讀破せざるべからず、但しこれにも歴史より國文を研

究するものと、文學より國文を研究するものと、語學の上より國文を研究するものとは、研究方法に多少の差あり、讀むべき書にはわけて差別あるべきこと固より也、よりて本篇には、歴史、文學、語學と相次第して研究法の一端を示す、

國文書には類本あり、異本あり、別本あり、註疏の書にも内容の純駁、卷帙の多少等ありて皆一樣ならず、これ等はその中に就てわけて優れしもののみを掲ぐ、

こゝに擧ぐる國文書は、主として足利時代以前のものに取る、刊本は普通のものを取る、註釋書はその得易きものを取る

第二章　歴史、雜史よりする研究

歴史上より國文學を研究すること、或は國文學書によりて日本の歴史を知らんとするものは首に古事記を讀み、次で榮花物語、三鏡の類を讀まざるべからず、單に本朝の歴史といへば、六國史より讀下するを最好の手段となせども、六國史は凡て漢文を以て記されたれば、國文研究の上には要なきものなり、尤も假字日本記の類は一應讀むべき書なりと考ふ、其他に假字の書なし

古事記は其序に「上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難、已因訓述者、詞不逮心、以連音者、事趣更長、以是今或一句之中、交用音訓、或一事之内、全此訓錄」とある如く、一種變體の文章にて、音を用ひたる所と、訓を用ひたる所と、漢文を用ひたる所と相交錯せり、されば古事記は國書中尤も讀むに困難の書にして、本居宣長の古事記傳世に出づるまでは一の註釋書さへあらざりしなり

古事記は寫本、刊本共に種類多く、刊本には德川光圀校本にて元祿四年刊行のもの、度會延佳の鼇頭古事記、長瀨眞幸の古訓古事記、(享和三年版)三國幽眠の古訓古事記等あり、明治年間のみにても三年版、四年版、(藤原政與)七年版、(坂田鐵安)八年版、(多田孝泉)等數種あり、經濟雜誌社の國史大系にも舊事本紀と合本のものあり、寫本にて傳はるものには、慶長の古寫本、眞淵頭書の寫本など外數種あるべし

註釋書は前に擧げし本居宣長の古事記傳を第一とすべく、此書は全部四十四卷、首一卷、目三卷、三大考一卷、合して四十八冊なり、弘化元年より刊行せられしが、之を得るに難からずと雖も高價なり、弘文館刊行の本居宣長全集中の活版本を購ふを

可とす、其他には平田篤胤の古史傳(二十四冊)敷田年治の古事記標註(七冊)吉岡德明の古事記傳略(十二冊)佐伯有義の古事記講義(二冊)等用ふべし

其他尙左の參考書あり

古事記私記	(一卷)	加茂眞淵
古事記訓考	(一卷)	同　上
難古事記傳	(五卷)	橘　守部
稜威言別	(十卷)	同　上
古事記集解	(三卷)	河村秀雄
古事記燈	(二卷)	富士谷成壽
古事記傳說	(八卷)	藤原以正
古事記燈	(一卷)	藤原成元
古史傳拾遺	(三卷)	渡邊重春
古事記裏書		卜部兼方
古事記集解		西田直養
辨古事記傳		小野高潔
古事記本義		多田義俊
古事記傳補缺		中村守臣

古事記年立

本居内遠

古事記譯解

鈴木雅之

本居宣長の古訓古事記（三冊九十錢前後）、村上忠順の標註古事記（三冊一圓五十錢）、鼇頭古事記（三冊七十錢）、古事記傳善本（二十圓以上）、古史傳（八圓前後の假格）なり、もし簡易の通俗本を求めんには、大久保初雄の活版古事記講義（六十五錢）を購ふべし、又古事記の梗概を知らんとするには、民友社刊行日本文學梗概中の、古事記梗概を看るを便とす

榮花物語（四十一卷）、宇多天皇の寛平より筆を起し、堀河天皇の寛治六年に終る、この間凡そ二百年、御堂關白道長を主題としてその榮華の樣をうつせり、一名世繼物語といふ、解釋書及參考書には榮花物語詳解（十冊）、榮花物語畧註等なるべく、安藤爲章の榮花物語考（一卷）野村房尙の榮花物語事蹟考勘（三卷）亦讀むべし

大鏡（八卷）、文德天皇の嘉祥三年より後一條天皇の萬壽三年に至る一名世繼物語、參考本には伴信友の大鏡考（一冊）、あり、校本には久米幹文の校訂大鏡（四冊一圓二十錢）萩野由之の校定大鏡（三冊六十錢）落合直文小中村義象の大鏡讀本（二冊六十錢）等あり、註釋本には小中村義象落合直文の大鏡詳解（一冊一圓六十錢）鈴木弘恭の校正大鏡註釋

（三册九十錢）等可ならん

宇治大納言物語、一に今昔物語といふ、正史に傳はらざる事蹟を多く擧げたれば、史料として頗る趣味多く、且つ當時の俗語を混じたる文章なれば、言語學上よりしても多大の興味ある書なり、（六十卷十五册新本一圓八十錢）

水鏡（三卷）、神武天皇より仁明天皇までの事蹟を記せり、參考本に大石千引の水鏡觀短抄、伴信友の水鏡考（一册）あり、又萩野由之の校正水鏡（一册三十錢）江見清風の水鏡詳解（一册一圓十錢）等あり

今鏡は一條天皇より高倉天皇迄の歴史なり、伴信友の續世繼考（一册）黑川春村の今鏡追考（一册）の外に、讀本、註釋本として關根正直の今鏡證註（二册五十錢）同じ人の校定今鏡（三册六十錢）等あり

增鏡（十卷）は今鏡の後を受け、後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで百五十年間の事蹟を記せり、讀本註釋本には、落合直文小中村義象の增鏡（一册二十五錢）和田英松の增鏡讀本（二册四十五錢）同じ人の增鏡詳解（一册一圓七十五錢）等あり、參考本には、伴信友の增鏡考（二册）岡本保孝の增鏡考（一册）等あり

戰記には保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、大平記等一讀すべし、保元物語は後白河天皇の即位より、白河院夜討

の事蹟までも收め、三卷三十七條あり、今泉定介の保元物語讀本（一册十五錢）關根正直の保元物語（一册二十五錢）中根淑の頭書保元物語（一册二十五錢）三木五百枝の保元物語講義（二册七十錢）内藤恥叟の保元物語註釋（一册六十五錢）等に就て見るべし、平治物語は平治の亂を記せるものにて、關根正直の平治物語（一册二十五錢）中根淑の頭書平治物語（一册二十八錢）今泉定介の平治物語讀本（一册十五錢）同し人の平治物語講義（二册九十錢）内藤恥叟の參訂平治物語註釋（一册六十五錢）等あり、其他岡本保孝の平治物語考（一册）の參考本あり平家物語は、平家の勅典よりその滅亡までの事蹟をしるす（全部十二卷）活版本にて落合直文小中村義象校の平家物語（一册二十五錢）今泉定介の平家物語講義（五册一圓七十五錢）等あり、古書には平道樹の平家物語標註（二十八册）よからん、又赤堀又次郎の國文綱要平家物語（一册六十五錢）と題せるものあり、源平盛衰記は今井弘濟、内藤直顯の參考源平盛衰記（四十八册）あり、又博文館刊行の活版本あり、太平記は太平記綱目（原友幹、六十卷）太平記評判（和田助則、五十卷）等の古書あれと、最も手に入り易きは、國文學會の太平記（五册一圓七十錢）三木の太平記詳解（五册三圓）にして、其他落合小中村の太平記（三册七十五錢）今泉定介の太平記讀本（一册三十錢）博文館校本（一册六十錢）等あるなり、其他多少の異色を

有するものにて、神皇正統記は一讀すべきものなり、この書の註釋書及讀本にては、今泉定介の神皇正統記講義（二冊五十錢）佐伯有義の標註神皇正統記（一冊二十八錢）等あり

其他雜史の讀むべきもの許多あれど、國文上の價値少きものは凡て除けり

第三章　文學よりする研究

文學の一邊より國文學書を研究せんには、時代を區分して研究するも一つの方法なり、種類を區分して研究するも一つの方法なり、其他尙種々の研究方法あらん、元來國文もて記されし近古以前の諸書は、歷史、雜史、有職、日記、物語、歌書、風土記の如何を問はず、凡て文學上の價値を有すること勿論なれば、これが研究の範圍を擴大すれば、其の全部に涉獵せざるべからず、されど本編は最も簡易なる研究方法を示すに止るを目的となすにあり、しばらく是を物語本、草子、日記紀行、歌集、雜の五に區分すべし

鎌倉時代以後に發展せる往來類、足利時代の特色たる謠曲、及び上古の宣命、祝詞、風土記等の類、便宜上これを雜の部に入

れたり

さて國文學上の歴史を大躰通曉すること亦必要なるべし、これ等の參考本には新本を措て他に求むべからず、三上三次の日本文學史（二冊二圓）關根正直の歴代文學（二冊八十五錢）和田萬吉の國文學（一冊一圓三十錢）鹽井正男の國文學大綱（一冊二十五錢三冊まで出版）等可ならん、されども何れも善本とは稱し難し

一、物語本類

物語本のはじめは竹取物語なり、竹取物語もとはかぐや姫の物語、又竹取の翁物語ともいひたり、この書ひとり物語本のはじめなるのみらなず、嚴なる意義にていふ國文、即ち雅言もて誌せる假名文のはじめなり、源氏に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけりとみへたり、活版本にては今泉定介の竹取物語講義（一冊二十錢）鳥井忱の同講義（一冊二十八錢）落合直文の同讀本（一冊十五錢）井上頼文の同講義（一冊二十五錢）等あり、其他の書には田中大秀の竹取物語（六卷）小山儀の竹取物語抄（二卷）などよからん

伊勢物語（二卷）は、加茂季鷹の傍註本（二冊四十錢位）あり、細川幽齋の闕疑抄（二冊四十錢位）あり、眞淵の古意（七冊一圓七十錢位）あり、契仲の臆斷（五

冊一圓五十錢位）あり、藤井高尙の新釋あり、この新釋は和本（六冊一圓六十錢）活版本（二冊三十五錢）の二種あり、其他には佐々木信綱の校註伊勢物語（一冊十二錢）今泉定介の伊勢物語講義（一冊二十五錢）等あり左にその重なる書目を擧ぐべし

- 伊勢物語拾穗抄（二卷）北村季吟
- 勢語臆斷（四卷）沙門契仲
- 伊勢物語新釋（十三卷）荷田春滿
- 伊勢物語新釋（六卷）藤井高尙
- 參考伊勢物語（三冊）屋代弘賢
- 伊勢物語講義（一卷）今泉定介
- 伊勢物語童子問（十三卷）荷田春滿
- 伊勢物語古意（六卷）岡部眞淵
- よしやあしや（一卷）上田秋成
- 勢語通（二卷）五井純禎
- 伊勢物語添註（二卷）清水濱臣
- 伊勢物語諸註參照解（十卷）
- 伊勢物語箋（二卷）橘守郎
- 添註伊勢物語註解（二卷）佐々木弘綱

其他の物語本にては大和物語（二卷）落窪物語（四卷）住吉物語（二卷）宇津保物語（二十卷）堤中納言物語（二卷）狹衣物語（八卷）とりかへばや物語（四卷）濱松中納言物語（八卷）唐物語等あり、時代の下れるは曾我物語、しづか、義經記の類なるべし

大和物語は、井上栗島二家の大和物語詳解（一册四十五錢）北村季吟の大和物語抄（六册一圓位）等よし、其他眞淵の大和物語直解（三卷）井上文雄の冠註大和物語（三卷）等あり、落窪物語は、中村秋香の落窪物語大成（四册一圓八十錢）同じ人の落窪物語講義（三册一圓三十五錢）春海千蔭の落久保物語註釋（二册五十錢）あり、其他は眞淵の落窪物語類語（四卷）飯田永夫の校註落窪物語（一册三十五錢）等あり、宇津保物語は桑原氏刀自の宇津保物語考（一卷）細井眞雄の宇津保物語玉琴（二卷）等見るべく狹衣物語は下紐（四卷）系圖（一卷）あり

源氏物語は國文書中の泰岱なり、其文章の上よりしても、結構の上よりしても、物語本中に匹敵なきは固より、假名文章はじまりてより以來の大著述なるべし、されば註釋書の類も頗る數多く、今一々擧げ難し、左にその重なるもののみを掲ぐ

註釋書の古くして浩瀚なるは、四辻善成公の河海抄（二十卷）なり

其他素寂法師の紫明抄（十二卷）萩原長親卿の源氏小鑑（三卷）一條兼

良公の花鳥餘情（二十卷）牡丹花肖栢の一乘抄（十五卷十本）西三條公條公の細流抄（二十卷）西三條實澄公の明星抄（五十五卷二十本）九條禪閤の孟津抄（二十一卷）林宗二の林逸抄（五十四卷二十六本）中院通勝卿の岷江入楚（五十五卷）能登永閑の萬水一露（二十八卷　六十二本）等なるべし、今得易く入易きものを求めば左の數書なるべし

源氏物語湖水抄（六十五卷）　北村季吟
源氏物語玉の小櫛（九卷）　本居宣長
源氏物語詳釋（十卷）　萩原廣道
源註餘滴（二十卷）　石川雅望
源氏物語忍草（五卷）　北村湖春
源註拾遺（二卷）　釋契仲
源氏物語新釋（三十二卷）　加茂眞淵

湖月抄（六十册）は十二圓より善本は十六圓位にて購ひ得らるべし、其他成島司直の忍艸（五册一圓六十錢）源語梯（三册三十五錢）少女卷抄註（一圓五十錢）宣長の玉の小櫛（九册一圓六十錢位）活版の湖月抄校本（八册一圓四十錢）落合小中村の校本（五册一圓二十五錢）增田干信の新編紫史（四册一圓）等は常に書肆の店頭に多し

以上諸書の外、源氏物語系圖（一卷）源氏物語年立（二卷）熊澤蕃山の

源氏外傳（五卷）安藤爲章の紫女七編（一卷）壺井鶴翁の源氏男女裝束抄（三卷）本居宣長の源氏年紀考（一卷）等は一讀すべき書なり、又五井純質の源語抄（四卷）と、前に擧げし源語梯とは、源氏中の語釋本なり

二、草子類

草子類は、時代痛く隔たりたれども、枕草紙と徒然草を以て其双璧となすべし、其他一二の雜抄をもこれに附錄す

枕草子（二卷）は、北村季吟の春曙抄最も讀まる、春曙抄十二卷、その十二冊のものと七冊のものとあり、今は活字版となりて三冊と一冊の兩種あり（十二冊本一圓位七冊本一圓五十錢）鈴木弘恭校本（三冊本九十錢）洋綴本（一冊七十錢）等なり、其他には萩野由之の標註枕草子（二冊六十錢）松平靜の枕草紙詳解（四冊一圓八十錢）佐々木弘綱の標註枕草子讀本（五冊九十錢）よかるべく古書には

枕草子傍註　（五卷）　岡西惟中

枕草子裝束抄　（一卷）　壺井義知

枕草子新釋　藤井高尙

枕草紙抄　（十五卷）　伊勢貞丈

等參考すべし

鴨長明の方丈記（一卷）讀むべし、この書もと草子といふにもあらねど、さりとて日記にもあらねば、今しばらくこの部に收めたり、この書を讀むには植島昭武の方丈記流水抄（二卷一本）最も好し

享保四年の刊本なり、新本には今泉定介の方丈記講義（一册十八錢）

中島筑山の方丈記評釋（一册十五錢）鳥居忱の方丈記拆義（一册二十五錢）鈴木弘恭の校正首書方丈記（一册十錢）落合直文の方丈記讀本（一册十三錢）等あり、古書には

方丈記諺解　元祿七年刊本　（二卷）

方丈記頭書　（一卷）　山岡元隣

方丈記細說　明暦四年刊本　（二卷）　加藤槃齋

等あり

方丈記を讀むものは、同じ長明の著たる發心集（三卷）西行の撰集抄（九卷）無住法師の沙石集（三卷）等を讀むべし、皆刊本あり

徒然草（二卷）は北村季吟の文段抄（七册一圓位）最も可なり、鈴木弘恭校本の活字本（三册九十錢一册合本六十錢）もあり、古本には淺香山井の徒然草諸抄大成（十册十圓八十錢）加藤槃齋の徒然抄槃齋抄（十三册一圓三十錢）林道春の野槌（十册一圓八十錢）岡西惟中のつれ〴〵直解（十册一圓二十錢）青

木宗胡の鐵槌（四冊四十錢）等あり、新本には增田千信のつれ〴〵草（一冊二十錢）伊藤平章の徒然草講義（二冊四十五錢）金子元臣の讀本（一冊十八錢）小中村義象の標註徒然草讀本（二冊五十錢）井上賴文の徒然草講義（一冊二十錢）等あり、其他には

徒然草抄	貞享二年刊本	（二卷）	立安法師
鐵鎚增補	貞享二年刊本	（六卷）	山岡元隣
徒然草慰草		（八卷）	松永貞德
同　句解	寶文五年刊本	（七卷）	高階楊順
同　諺解	享寶五年刊本	（五卷）	南部宗壽
同　大全	同年刊本	（十三卷）	高田宗賢
同　參考		（八卷）	淨福寺惠空
徒然草集說	元祿十四年刊本	（十五卷）	隱者閑壽
同　奧儀抄	正德六年刊本	（六卷）	高屋近文

等よかるべし

十訓集、著聞抄は合本活字本あり、但し惡本なり、古本亦求め易し

三、日記類、紀行類

日記の優れしものは紀貫之の土佐日記なり、古今集の序と共に國文の二妙たり、香川景樹の土佐日記創見（五冊一圓五十錢）富士谷御杖の土佐日記燈（三冊一圓五十錢）岸本田豆流の土佐日記考證（二冊四十五錢）橘守部の船の直路（二冊四十五錢）新本には鈴木弘恭の土佐日記考證付地理辨（一冊二十五錢）今泉定介の土佐日記講義（一冊二十錢）落合直文の土佐日記讀本（一冊十三錢）又佐々木弘綱の俚言解（二冊二十五錢）あり、其他のものは

土佐日記打聞　（二卷）　揖取魚彦

同　附註　（一卷三本）　人見卜幽

同　抄　寶文六年刊本　（二卷）　北村季吟

同　首書　寶永四年刊本　（二卷）

同　註　寫本　（一卷）　加藤宇萬伎

等にて、地理の考證には鹿持雅澄の土佐日記地理辨（一卷）福島成行の土佐日記地理考（一冊十五錢）等あり

紫式部日記は、源氏の讀まるゝ間共に讀まるべき書なり、壺井義知の紫式部日記傍註（一冊五十錢）清水宣昭の紫式部日記釋（四冊一圓二十錢）鈴木弘恭の校正首書紫式部日記（一冊二十錢）長田致孝の紫式部日記講義（一冊三十錢）三木五百枝の同じ講義（一冊三十錢）あり

其他讀むべき日記紀行等には增基の庵主、道綱朝臣の母の蜻蛉日記（八卷）和泉式部日記（一卷）更科日記（一卷）讃岐典侍日記（二卷）須磨記（一卷）松島記（一卷）辨內侍日記（二卷）中務內侍日記（一卷）海道記（一卷）東關紀行（一卷）十六夜日記（一卷）等あり、中に就て更科日記には大塚彥太郎の更科日記講義（一册三十錢）關根正直の更科日記略解（一册三十五錢）あり、十六夜日記には殘月抄（三册五十錢）三木五百枝の十六夜日記講義（一册十五錢）內田慶三の十六夜日記敎本（一册四十五錢）等あり以上の諸書以外には阿佛尼の轉寢記（一卷）一條兼良公の關藤河の記（一卷）二條良基公の小島のくちすさみ（一卷）今川了俊の道ゆきぶり（一卷）廻國雜記（一卷）等なるべし

四、和歌

和歌は國文學の主要なる部分を占む、古事記と萬葉書が上古の日本文學を飾れば、源氏物語と古今集は中古文學の精粹を代表す、其後の勅撰、家集、皆それ〳〵の特色ありて、一として捨てべきものはなし、若し單に作歌の上にのみ就てならば、縣門桂園の諸著を讀みて事足るべきも、少くも歷史的に和歌の發展せし跡を尋ね、文運の消長、人心の張弛、聲調の新古を知らん

には、二十一代集に指を染めざるべからず、左らずとも尙萬葉古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千載、新古今諸集と其他主要なる家集の一二に渉獵するを要す、左に萬葉以下の諸集に就て、研究上の便宜なるべき註釋書、參考書若干を擧ぐべし

萬葉集は歌集の始にして勅撰に準せらるゝといへり、其撰者は萬葉裏書、榮花物語に橘諸兄公とあり、契仲はこれを家持の私撰といふ、されど橘諸兄公の撰にて、家持の續撰せしといふ仙覺抄の說眞を得たらんといへり、全部二十卷、雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌、四季、四季相聞の六部に分ち、其歌數は古義によれば長歌二百六十二、短歌四千百七十三、旋頭歌六十一、合して四千四百九十六章といふなり

萬葉は漢字を以て誌せるも、其訓は所謂萬葉假名にして義訓、略訓、約訓、借訓、戲書等の別ありといふ、故に艱澁にして解しにくきもの多く、村上天皇の天曆年中、源順、大中臣能宣、清原元輔等に詔して、梨壺にて訓點を施しめ玉ふ、これを古點といふ、次に大江佐國、藤原孝言、大江匡房、源國信、源師賴藤原基俊等の點あり、これを次點といふ、されど未だ訓ずること

と能はざりしもの百五十二首ありしを、仙覺法師殘らずこれに訓を施したり、これを新點といふ、德川時代に至りて契仲の代匠記、眞淵の萬葉考出でゝ近代には鹿持雅澄の古義出版せられかくて萬葉の研究も完成に近きたるなり

萬葉集は、其思想の上に於て多少儒學と佛敎の影響を受けたれども、比較上これを純粹なる日本國民の性情を歌ひしものと做して可なり、即ち古撲にして剛健なる和歌の體は、この集を措て他に求むべからず、故に古事記とこの和歌集とは、隋唐高麗の思想に浸染せざる日本國民固有の精神風尙を知るが爲には、實に無比の寶典といふべきものなり

萬葉は古寫本の外に、古活字本、寛永刊本、寶永刊本、文化本尙其他にも許多あるべし、刊本は藤原以文校本(二十册三圓二十錢位)及其他の刊本(二十册三圓位)の外に、博文館刊行の活字本あり、善本といひ難し、註釋本にては、契仲の代匠記、千蔭の略解、鹿持雅澄の古義等其優れしものにて、各數種あり、代匠記(三十一卷)は活字本二種あり、略解(二十卷)は大本(三十二册七圓五十錢)と、活字本(七册一圓五十錢)とあり、加茂眞淵の萬葉考(別記附十册一圓八十錢)亦讀まざるべからず、鹿持雅澄の古義亦大本(百二十五册五十圓)と活字本(三十一册二十圓)とあ

り、其他には仙覺法師の仙覺抄（二十册五圓）北村季吟の拾穗抄（三十册三圓五十錢）正木千幹の萬葉楢落葉（五册一圓）海北若冲の萬葉類林（寫本十五册八圓位）荒木田久老の槻の落葉（三册一圓二十錢）等亦得易し、新本には木村正辭の萬葉集美夫君志（四册二圓五十錢）可なり、若以上の他に註釋書參考書を求めんとならば

詞林采葉　寫　（十卷）　釋由阿

萬葉集宗祇抄　寫　（五卷）

萬葉集見安　貞享六年刊　（二卷）

同　補正　（十卷）　上田秋成

見安は二册五十錢補正は四册一圓三十錢位にて購はるべし

萬葉集童蒙抄　寫　（八十卷）　荷田春滿

萬葉選要抄　安永八年刊本　（二十卷）　俊道惠岳

萬葉集旁註　寛政六年刊　（二十卷）　仝　上

萬葉集玉の小琴　寫　（一卷）　本居宣長

萬葉類葉抄補闕　寫　（十五卷）　入江昌喜

萬葉緯　寫　（二十卷）　今井似閑

萬葉緊要　刊　（二卷）　橘守部

釋萬葉集　（五十卷）　德川光圀

萬葉集燈（五卷未完）　富士谷成章

萬葉集攻燈（十五卷）　岸本由豆流

の諸書に渉獵すべし、尙木村博士の萬葉集書目提要（二卷）に付けば、萬葉集に關する註釋書の全班を知り得ん也

時代よりしても、其價値よりしても、萬葉集に次くものは古今和歌集なり、古今集は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四家が、醍醐天皇の勅を奉じて、延喜五年四月に萬葉に入らざる新古の和歌を集めて大成したるものなれば、其簡撰の精しきは古今無二なり、又和歌の風は、萬葉の渾厚古樸なしと雖も決して輕佻浮華の作什を發見することなし、いはゞこの集は、平安朝時代に於ける文華の爛熟せる結果なれば、聲調措辭共に巧妙の域に達し、村田春海の「調べの整ひたるさまをよく見んと思はゞ先づ古今集を味ふべし古今集は調べを本とすればなり」といひしも道理なりと覺ゆ、偖古今集の註釋本といふべきは契仲の餘材抄、宣長の遠鏡、景樹の正義、眞淵の打聞等を以て其最もとなすべく、眞淵の打聽は二十冊本（二圓五十錢）あり、合本（五冊一圓五十錢）あり、又十冊本（一圓六十錢）あり、宣長の遠鏡は大（六冊一圓十錢）小（六冊五十錢）二種あり、活字本（二冊二十錢）あり、又山崎美成の

頭書、遠鏡（八冊七十五錢）あり、香川景樹の正義は活字本（四冊一圓二十錢）最も多く行はる、其他顯註密勘（八冊一圓）古今榮雅抄（二十冊一圓二十錢）等亦參考すべし、新本には小中村義象增田干信の古今集講義（五冊五十五錢）あり、飯田永夫の古今和歌集（一冊二十五錢）あり、增田干信の古今和歌集講義（二冊六十錢）あり、金子元臣の古今和歌集評釋（二冊七十二錢）あり

古今集聞書　（三卷）　阿佛尼

古今集傳授　刊本　（一卷）　今川了俊

古今通　寫本　（二十卷）　五井純禎

古今和歌集鄙言　刊本　（六卷）　尾崎雅嘉

古今秘註抄　寫本　（三卷）

古今增抄　刊本　（殘缺九卷序二卷）

古今集評註　（十卷）　野之口隆正

等の古書も亦參看の要あるべし

時代より古今集に次くものは後選和歌集なり、後撰集は村上天皇の天曆五年十月、梨壺の五人に詔して昭陽舍に萬葉を訓點せしめ玉ひし序に、古今集に入らぬ昔し今の和歌を撰ばせ玉ひしものなり、梨壺の五人とは、坂上望城、源順、紀時文、大中臣

能宣、清原元輔をいふなり、この集簡擇疎にして謬ありとはいへど、清少納言が「集は萬葉古今後選」と言へし如く、前の二集に次ぐべき價値あるべし、註釋書には中山美石の後選集新抄（八冊一圓七十錢）あり

拾遺和歌集は花山の院の御撰とも、又は一條天皇のとき藤原公任卿の勅を奉じて撰みしものともいふ、收むる所の和歌一千三百五十七首、以上古今後選拾遺を三代集とはいふなり、拾遺は只風姿のすなをなるものを撰みしものにて、さして特色を有するものにはあらじ、却て藤原通俊朝臣が應德三年九月に選びし後拾遺和歌集（二十卷）こそ增ならめ、後拾遺は名歌少からず、殊に紫式部、清少納言、相模、伊勢、小式部、大貳三位以下、女流作家の多きは其異色とする所なり、これに次ぐを金葉、詞華、千載、新古今諸集とす、中に就て新古今最も讀まる、同集は、本居宣長の美濃の家苞（折添附八冊一圓八十錢）石原正明の尾張の家苞（九冊一圓七十錢）東常緣の新古今和歌撰抄（六冊八十五錢）等讀むに可也、新本には鹽井正男の新古今集詳解（六卷一卷三十五錢）最も可ならん、以上古今より新古今に至り、通じて和歌八代集といふ、其註本には北村季吟の八代集抄（五十冊十四圓）あり、契仲の二四代鈔（二冊）岸本弓絃の

八代集增抄(五十册)足代弘訓の八代集部類(三十册)亦可なりこの後の勅撰にも、それ〳〵時代の特色はあれど、强て讀むべき程のものなし、若し二十一代集(四十三册七圓位)坐右にあらば大に可なり、然らずば八代集にて事足れり、唯南朝の三葉中新葉集(二十卷四圓六十錢)は、芳野の宮に奉仕せる人々の詠なれば、歌はさばかり優れずとも讀みて心の動くこと多し、これ亦一讀の書なるべし、其他私撰は凡て省略に從ふ

家集にて一たびは寓目すべきもの、西行の山家集、活版一本あり(一册十八錢)、千勝義重といふ人の評釋(一册十八錢)あり、實朝の金槐和歌集、これ又活版本あり、宗良親王の李花集、兼好の家集、頓阿の草庵和歌集等あり、草庵和歌集は、梅月堂の草庵集蒙求諺解(二十册二圓)本居宣長の玉箒(六册八十五錢)等讀むべし

又歌學及び評論に關するものには、八雲御抄、奥儀抄、袋草子和歌初學抄、清輔雜談抄、初中抄、悅目抄、新選腦髓、古語深秘抄、詠歌大概、三部抄、古來風體抄等あり、これ等は多く群書類從中に收めらる、其他細川藤孝の耳底記(一册五十錢)和歌六部抄(六卷)は刊本あり、俊成卿の風體抄(五册一圓五十錢)長明の無名抄(二册四十錢)芝山持豐卿の歌道御答書(四册六十錢)亦刊本あり、存採叢書

の歴代和歌勅撰考（五冊一圓）これも一讀せざるべからず

五、雜

記紀萬葉の古文學以外に一異色あるものを祝詞、宣命、風土記、の文と爲す、祝詞は宣解言の義にて、神祭の所由とその神德を贊する詞なり、作者と時代は今これを詳にすることを得ざれども、延喜式第八卷に祝詞二十五篇を收めたるによれば、其由來の古きこと知るべし、中に就て大祓詞、大殿賀詞、出雲國造神壽詞、中臣のよこと等の數篇、尤も價値ある文字と爲されたり、

この註釋本として、加茂眞淵の祝詞考（二冊六十錢）久保季茲の祝詞畧解（六冊七十錢）本居宣長の大祓詞後釋（二冊五十錢）出雲國造神壽後釋（二冊三十五錢）平田篤胤の祝詞正訓（一冊三十錢）荒木田守訓の大祓詞新釋（一冊二十錢）岡吉胤の大祓述義（一冊二十五錢）等あり、俗本には中臣祓風水草管窺（寫本一冊五十錢）中臣祓諸葉草（寫本一冊三十錢）祝詞解釋摘要抄（三冊四十錢）等見るべし、又文章の方面より專ら祝詞を研究せしものは、橘守部の文章撰格、權田直助の國文學柱等を最とす

宣命は詔勅なり、後には漢文にて綴りたるを詔勅といひ、國語にて綴りたるを宣命といふ樣に變れり、續日本紀には持統天皇

以後のもの六十二篇を收め、其以前の日本紀に見ゆるものは、盡く漢文に改め作られたり、これももとは國語にて綴りしものと思はる、西宮記に、宣命は神社山陵の告文、立皇后立太子任大臣の節會、任僧綱天台座主、及び喪家の告文なりと記されたれども、これ後世の制なりといふ、この註釋書には本居宣長の歴朝詔詞解（六册一圓八十錢）あり、文章の研究としては前に擧げたる文章撰格、國文學柱等參看すべし

風土記亦上古の作たり、古文學を味はんものは必ず一讀せざるべからず、されども和銅上進の風土記は、全存のもの出雲風土一篇にして、常陸、丹後は殘缺本を傳へ、播磨、肥前、豐後の三風土記は和銅の古風土記にや、延長の新風土記にや審ならず其他には筑紫、阿波、土佐、備中、日向等の逸文風土記を傳ふといふ、この註釋本、參考本には左の數種あり

逸風土記　寫本　（一卷）　今井似閑
古文風土記逸文　寫本　（一卷）　伴信友
諸國採輯風土記　寫本　（二卷）　狩谷望之
逸文風土記　（三卷）　黑川主水
風土記概論　（一卷）　山名信名

標註古風土記　刊行　（一卷）　栗田寛
古風土記逸文　刊行　（二卷）　仝　上
出雲風土記解　（三卷）　内山眞龍
出雲風土記考　寫本　（一卷）　荷田春滿
標註常陸風土記　（一卷）　栗田寛
常陸風土記註小補　（一卷）　伴信友
標註播磨風土記　刊本　（二卷）　敷田年治
訂正出雲風土記　文化三年刊本　（三卷）　千家俊信
出雲風土記考　寫本　（十卷）　横山永福

出雲風土記註小解　（一卷）　伴信友
頭註出雲風土記　（一卷）　荒木田久老
箋釋豐後風土記　文化刊本　（一卷）　唐橋世濟
頭註豐後風土記　寛政十二年刊本　（一卷）　荒木田久老
豐後風土記註小補　（一卷）　伴信友
肥前風土記畧註　寫本　（一卷）　仝　上
歌註肥前風土記　寛政十一年刊本　（一卷）　荒木田久老

鎌倉時代より足利時代に亘りて一種の文體出てぬ、これ往來躰なり、もとは中古の日記文に出でしと覺ぼしく、東鑑の文の如

きもこれと遠からず、德川時代に於ける消息文體は又これより變化せしものなるべし、この文集には纔に藤原明衡の明衡往來（三卷）新猿樂記（一卷）あるのみ、明衡往來一に明衡消息とも、又雲州往來ともいふ、新猿樂記は寫本にて傳はり、往來にはあらずと雖も、文はその體を用ひぬ、玄惠法師の庭訓往來はこの二書より出でたり、多田義俊云ふ「今按ずるに玄惠の編れし庭訓往來は、明衡往來と新猿樂記をとりあはせて文體を俗に通じやすきやうに書きたるものなり」云々、庭訓往來の釋本には、永井如瓶の庭訓往來諺解（五卷）あり

足利時代には更に謠曲と連歌あり、謠曲には林道春の謠抄（刊本二十卷）同じ人の謠曲古抄（慶長活字版二十卷）あれども容易に手に入り難し、古本なれば大井直恕の謠曲拾葉抄（二十册四圓八十錢）新本にて大和田建樹の謠曲通解（一册二圓五十錢）よからん、江島伊兵衞の八拍子（三册一圓七十錢）亦參看すべし、連歌は群書類從に菟久波問答、吾妻問答の諸書あり、又新本に佐々醒雪の連俳小史（一册四十五錢）あり

第四章　語學よりする研究

語學よりして國文を研究せんものは、先づ言語學の大體に通ず

るを要すべきなり、言語學はもと專門の學科なれば、國文研究の端緒としてこれを講ぜんには、翻譯書又は簡易の書にて可なり、これを近刊の書に求むれば、英人セースの原著を上田萬年金澤庄三郎の共譯せし言語學（一冊五十錢）米人ホノートニー著保科孝一譯の言語發達論（一冊四十五錢）佛人ダルメステッテル著金澤庄三郎譯のことばのいのち（一冊二十錢）保科孝一の言語學大意（一冊五十錢）同じ人の言語學講話（一冊九十錢）野崎茂太郎の解說言語學（一冊八十錢）等の數種あり、又國語に關しては、保科孝一の國語學小史（一冊一圓三十錢）山口勇雄の國語要義（一冊七十錢）大矢透の國語溯源（一冊六十錢）上田萬年の國語のため（五十錢）赤堀又二郎の語學叢書（一冊一圓四十五錢）春山作樹の語學手引（一冊六十五錢）等を參照すべし、次に日本文典に關する著書は新古共に其數多く、今一々これを擧げ難しと雖も、先づ最も獲易き新本よりすれば、中村秋香の皇國文法釋義（一冊一圓）大槻文彥の廣日本文典（四十錢）同別記（四十五錢）落合直文の日本大文典（一圓六十五錢）林雍臣の日本文典（二冊一圓）岡倉由三郎の日本文典大綱（五十錢）岡田正美の日本文典（二冊七十錢）等を優れしものとせん、古本にては契冲の和字正鑑抄（五冊一圓二十五錢）及びこれを駁せし橘成員が倭字古今通例全書（八冊七十五錢）並せ看るべく、加茂眞淵の冠字

考（十册一圓五十錢）本居宣長の字音假字用格（一册二十五錢）ひも鏡（四錢）詞の玉緒（七册七十五錢）玉あられ（一册二十八錢）楫取魚彦の古言梯（一册二十八錢）本居春庭の言葉の八衢（一册三十五錢）詞の通路（三册六十五錢）義門和尙の山口栞（三册一圓二十錢）活語指南（二册五十五錢）玉の緒繰分（五册一圓二十錢）小澤芦菴のふり分かみ（一册二十錢）中島廣足の玉霰窓廼小篠（活字本五册一圓二十錢）鈴木重胤の詞のちかみち（五册一圓）阿波谷千生の詞の組立（二册一圓三十錢）伴信友の假字本末（四册一圓二十錢）橘守部の山彥册子（三册一圓三十錢）鶴峰戍申の語學新書（二册三十八錢）等よかるべし

次は字書なり、字書は得易き新本よりすれば、近藤眞琴のことばのその（六册一圓七十五錢）落合直文のことばの泉（一册五圓五十錢）物集高見の日本大辭林（一册五圓）等よく、大槻文彥の言海（一册三圓）は雅俗の兩語を集め得て至便なり、古書には

倭名類聚抄	（二十卷十本）	源　順
新撰字鏡	（十二卷今本一卷）	僧　昌住
海藏畧韻	（十卷今本二卷）	虎關禪師
節用集（寫本）	（二　卷）	林　宗二
倭爾雅	（八卷九本）	貝原好古
日本釋名	（五　卷）	同　上

東雅（二十卷十本）　新井白石
同文通考（四卷）　同上
漢字和訓（八卷二本）　井澤長秀
和訓類林（七卷）　海北若冲
和訓栞（前編十三卷十四本）　谷川士清

等あり、和名類聚抄は普通本（五冊一圓八十錢）あり、活字本あり、新撰字鏡今本（二冊寫本六十五錢）あり、得難しといふ程にてもなし、和訓栞（りはり）は中篇を合して六十四冊（六圓八十錢）今合して活字本（三卷九圓）とせるものあり、その他古本の得易きものにして參照すべきものは本居宣長の漢字三音考（一冊二十八錢）高井蘭山の音訓國字格（一冊十八錢）柴貞毅の雜字類編（二冊四十錢）岡田挺之の常語藪（二冊三十五錢）橘守部の助字本義一覽（二冊五十五錢）上田秋成の靈語通（一冊四十五錢）和玉篇（三冊一圓）下學集（一冊二十五錢）沙門文雄の韻鏡（二冊二十五錢）同餘論（三冊四十錢）等なるべし、上木せざるもの、及び得易からざる書は多く省略に從へり

第三編　漢文學研究法

第一章　漢文研究の要約

漢文研究法に二の目的あるべし、一は漢文を習讀して自家着筆の素を作ること也、再言すれは文章上よりして漢文を研究するものなり、二は漢文研究を支那研究の手段としてこれを試むること也、この目的の爲にするもの、又分ちて二となすことを得べし、其一は古代の支那を研究すること也、其二は現代の支那を研究すること也、現代の支那を研究するものは主として政治上及び通商上の目的よりしての研究なれば本編はこれに就て説明するの要なし、古代支那の研究は、同族異文の日本人よりしては、實に漢文研究を以て其第一着手となさゞるべからず、但しこれ亦分ちて哲學、史學、文學の三部門となすことを得べし今この次第を圖に現はせは左の如きものと爲る

漢文研究
- 習文の必要より漢文を研究するもの
- 現代支那の研究……政治上の目的 通商上の目的
- 經釋

支那研究の必要より漢文を研究するもの

古代支那の研究

(一)哲學
(二)史學
(三)文學
子解
音韻訓詁

支那三千年の歴史文學の、學者の研鑽に値すること固よりながら、支那研究の殊に主要なるものはその哲學なり、經解子釋なり、然してこの研究にも亦難易二門あり、易きよりすれば、先つ邦人の著述に就てその解釋を求め、漸次淺きより深きに入るを得べく、難きよりすれば、顧亭林以來清朝語學者のとる所の研究方法に從ひ、音韻訓詁の學より尋ねて先秦の言語文學を究明し、よりて先賢の遺旨を尋繹すること也、されども是れ一を斯學の研究に献ぐるものならでは、容易に成し難き難行門なり、本編はその易きより先つ研究方法の端緒をはじめ、並せて考證學者の著述に渉獵するをその手段と定めたり

此の如くにして漢文研究の部類を、假りに經釋、子解、歴史、文學、音韻訓詁の五門に分つ

讀書之法、看讀寫作四者每日不可缺一、看者、如爾去年看史記漢書韓文近思錄、今年看周易折中之類是也、讀書如四書詩書易經左傳諸經昭明文選李杜韓蘇之詩、韓歐曾王之文、非高聲朗誦則不能得其雄

偉之槩、非密詠恬吟則不能探其深遠之韻、譬之富家居積、看書則在外貿易、獲利三倍者也、讀書則在家愼守不輕花費者也

曾文正公家訓

第二章　經釋の研究

一概に經釋といふも、說くものの學ぶものによりて其義に差あり、これを道學書、倫理說として躬行を主とするものあり、解釋の上に自家の立脚地を定め、一派の學說を執するものあり、訓詁を尋ねて忠實に遺經を解釋せんと勉むるものあり、さりながら是れとても斯く截然として區別せらるゝにもあらじ、よし學說の涇渭に左まで拘泥せずとも、自說を有するだけ已に中に執する所あるものなれば、彼を採り此を採るといふも要するに一個の立說なり、故に朱陸の辨、新古の說、已に紛糾して解けざる上に、折衷說なるものありて更に黑白混淆せり、中には幽窅艱深の理義を避け、孔孟の敎學を日常の履範と解して、只管この方面に力を着くるものさへあれども、これを叩けば尙一個の見案を具すること、他の道學先生と何の異なる所なし、若し之を單に學說として解するものと、更に道學として奉するものと、二者を明かに分離せしならば、或は少しく其混雜を防ぎ得たり

しならんも、二者全く混同し、伸縮の差こそあれ、學者皆この兩面を具有するに至りたれば、末流大に濁りて洙泗の源頭に溯ること至難となれり、加ふるに程朱陸王の諸學、強て孔子敎の名の下に學說の根抵を託し、各々其門戶を大にせんとして相詆誹し、眞源探討を以て第二義となせり、かくて淸儒が門戶の爭を一掃して音韻訓詁の學により、先秦哲學の眞義を闡明せんと勉めたる以前は、哲學と道德は打して一丸とせられ、正義と私案は打混ぜられ、彼に入るものは此に出で、屋下に屋を構へて相爭ひしも、徵實の學起りてより、學者漸く沈靜の態度をとりて斯學の研究に身を委ぬるに至りたり、偖經釋の恰好方便を說かんとして、予は邦人の著述より先にすべきこと前に擧げし如しと雖も、實は邦人の書に自己の學派を離れ、公平の地位より觀察を下したる著述太だ少し、されど解し易きことは是に勝るものなければ主として邦人の著述をこゝに擧ぐることとせり

支那哲學及び孔子の學說等を概論せしもの新本に遠藤隆吉の支那哲學史（一册一圓五十錢）あり、狩野良知の支那敎學史略（二册七十五錢）あり、亘理章三郎の孔門之德育（一册五十錢）あり、中內義一の支那哲學史（一册三十錢）あり、山田喜之助の孔敎論（一册）あり、福地源一郎

赤沼金三郎二氏に各々孔夫子（一冊）の著あり蠻江義丸の孔子研究（一冊二圓）あり、就中遠藤氏の支那哲學史は他に類書なければ一本を購ひ置くを可とす、狩野氏の教學史略、蠻江氏の孔子研究亦必ず一讀せざるべからず、古書に屬するものは左に書名を掲く

爲學要說	（一卷）	三宅尙齋
般鑑論	（一卷）	古賀煜
闢異	（一卷）	山崎嘉
侗菴新論	（十七卷）	古賀煜
中和集說	（一卷）	山崎闇齋
好學論照考	（一卷）	淺見安正
講學鞭策錄	（一卷）	佐藤直方
南軒義理辨	（一卷）	淺見絅齋
迂齋先生學話	（一卷）	稻葉正義
迂齋先生和書集	（十卷）	仝　上
不亡鈔	（四卷）	室直清
五倫名義解	（一卷）	仝　上
拘幽操附錄	（一卷）	淺見安正
佐藤先生語錄	（各一卷）	佐藤直方

佐藤直方先生學話

明道論性私考　（一卷）　淺見安正
初學得業次第　（一卷）　林衡
閑蹤餘事　（一卷）　中井積善
儒問思問錄　（二卷）　林道春
默識錄　（五卷）　三宅重固
正學撰掌　（一卷）　尾藤二洲
非物篇　（六卷）　五井蘭洲
非徵　（八卷）　中井竹山

この二書は徂徠の論語徵を非難したるものなり

言志四錄　（四卷）　佐藤坦
哀敬篇　（三卷）　仝上
集義和書　（十六卷）　熊澤伯繼
洗心洞劄記　（三卷）　大鹽後素
儒門空虛物語　（三卷）　仝上

（以上程朱派）

（以上陽明派）

童子問　（三卷）　伊藤仁齋
古今學變　（三卷）　伊藤東涯

訓幼字義　（八卷）　仝　上
學問關鍵　（一卷）　仝　上
辨疑錄　（四卷）　仝　上
經學文衡　（三卷）　仝　上
古學指要　（二卷）　仝　上
辨道名　（一卷）　物徂徠
辨道書　（二卷）　仝　上
聖學問答　（二卷）　太宰純　上

爲學初問　（二卷）　山縣孝孺
（以上古學派）
經義折衷　（一券）　井上金峨
仁說　（一卷）　豐島豐洲
仁說三書　（三卷）　太田錦城
聖道合語　（三卷）　冢田大峯
聖道辨物　（三卷）　仝　上
標註辨妄　（一卷）　安井衡
隔靴論　（一卷）　鹽谷世弘

野芹　（三卷）　細井德民

名疇　（六卷）　皆川愿

（以上折衷派）

以上一二の書名を擧げしと雖も、この書は諸家の學說を盡せるにもあらじ、又經學の要訣を得たるにもあらじ、且各々門戸の見を交ゆること多ければ、取捨は讀者の心にあることなれども諸家の經學に對する意見行間に錯出すること少からざれば、必ず一たびは之に涉獵すべきものなり、尙育成社出版の倫理彙編は、邦人の著述の主要なるものを集成したる大著なり、全部十冊代價金十四圓なり、若し其概要を知らんと欲せば、井上哲次郎の日本陽明派の哲學（一冊一圓四十錢）日本古學派の哲學（一冊一圓四十錢）日本朱子派の哲學（一冊一圓四十錢）高瀨武次郎の日本陽明學（一冊五十錢）法貴慶三郎の山崎闇齋派の學說（一冊七十錢）竹內松忠の伊藤仁齋（二十五錢）伊藤東涯（二十五錢）山路彌吉の荻生徂徠（十八錢）塚越芳太郎の熊澤蕃山（一冊八十錢）等よかるべし

經學一般の解說書に就ては以上にその大要を擧げたり、元來經釋といふことにも、嚴密にいへば二種の意義ありて、孔子を主體としたる儒學を主として研究すること、尙書、詩書、三禮の

如き古經を主として研究することとなり、されども此處には普通の意義に從ひ、儒學を主として說明し、次に他の諸徑の研究に及ぶべし、偖て儒學を主として研究すべきことゝすれば、孔子の語錄ともいふべき論語は第一に研究せらるべきものなり、元來論語は孔子の遺書なれども、學者の說によれば魯論語、齊論語、古論語の三種あり、今傳ふる所の論語は全く此三者を混同せしものなり、これ等のことは贓林の經義雜記、徐養原の論語魯讀考にて明瞭せん、偖前例によりて邦人の論語（及び學庸孟）解釋の書を擧ぐれば、朱子派には

四書序考　（四卷）　山崎闇齋
論語諺解　（一卷）　林道春
論語諸說　（一卷）　三宅尙齋
論語筆記　（三卷）　仝上
論語廣義　（四卷）　室直淸
非物篇　（六卷）　五井蘭洲
非徵　（八卷）　中井竹山
論語述　（十卷）　平俞
論語說　（三卷）　太田方齋

論語管窺記　（一卷）　古賀侗菴

等の諸書ありて安部井聚の訓蒙四書輯疏（三十卷）は尤も平易にして解し易し、陽明派には

論語鄉党翼信　（三卷）　中江藤樹

論語講說　（一卷）　仝　上

論語小解　（八卷）　熊澤蕃山

論語欄外書　（三卷）　佐藤坦

論孟撮說　（三卷）　東澤瀉

の諸書あり、古學派には

論語古義　（十卷）　伊藤仁齋

論孟古義標註　（四卷）　伊藤東涯

論語國語解　（十卷）　小河立所

論語便蒙　　淺野文安

論語徵　（十卷）　物徂徠

同　煥　（三卷）　中根鳳河

同　疏　　菅沼東郭

同　考　（三卷）　宇都宮遯菴

論語古訓　（十卷）　太宰純

同外傳（二十卷）　仝上
論語々由（二十卷）　龜井魯
論由述志（十卷）　龜井昱
論語考（六卷）　宇野明霞

等最なるべく、其他折衷派考證派には

論語一貫（五卷）　片山兼山
冢註論語（十卷）　冢田大峯
論語群疑考（十卷）　冢田大峯
論語新註（四卷）　豐島豐洲

論語繹解（十卷）　皆川愿
論語大疏（八册）　太田錦城
論語集說（六卷）　安井息軒

の諸書あり、其他松平頼寛の論語徵集覽（二十卷）は、何晏の集解、朱註、仁齋の古義及び徂徠の論語徵を合刻せしものにて、西岡天津の論語徵訓約覽（十卷）は、漢儒宋儒の注と、徂徠春臺の註を合刻し、朝川鼎の論語集談は、宗元明清諸儒の註疏を輯錄せしものなり、論語の解はこれ等にて大抵充分なるべし（又近日根本通明の論語講義出でたり）

以上の諸書中、上木せざるものあり、刊行書にても容易に手に